

The Implementation of Lottery-Drawing from Golden Urn System in Yonghegong in Qing Dynasty

〈in Japanese〉

Ayanna

Associate Researcher, China Tibetology Research Center

〈Translated by〉

Manning Li

Research Assistant, Research Center for World Buddhist Cultures,
Ryukoku University

Abstract

In 1792-1793, the Qing court has established a golden urn in Jokhang Temple in Lhasa and Yonghegong in Beijing respectively, and regulated that all the Khutuktus in Tibetan and Mongolian regions should be recognized in accordance with lottery-drawing from golden urn system. Based on previous research, the implementation of lottery-drawing from golden urn system in Jokhang Temple is well known, while that in Yonghegong is not quite clear currently. The publication of Manchu, Han and Mongolian documents of Yonghegong kept in the First Historical Archives of China provides us details of implementation of lottery-drawing from golden urn system in Yonghegong in recognizing several Khutuktus. Based on these details, this paper further discusses functions of lottery-drawing from golden urn system.

要 旨

乾隆五十七年から五十八年にかけて、清朝廷が^{ラサ}ラ薩の大昭寺と北京の^{ようわきゆう}雍和宮において、各々金瓶一つを設置し、それ以降の蒙蔵地域における^{フクトクト}呼圖克圖の^{ホビルガン}呼畢勒罕は^{きんぺいせいせん}金瓶掣籤により認定することを定めた。これが清代の金瓶掣籤制度の確立であった。関連する先行研究では、チベットにおける金瓶掣籤の実施事情に対しかなり具体的・深層的な検討がある一方、雍和宮における金瓶掣籤の状況に関しては、今に至っても明らかになっていない。今、中国第一歴史檔案館が保存している雍和宮満・漢・蒙文檔案史料が公表されたことは、我々の深めていく研究に一定の事例を提供してくれた。それらの資料から、金瓶掣籤制度が雍和宮において実施され、^{チャンキヤ}章嘉、^{ガルデン・シレトウ}噶勒丹席熱圖、^{ミンドル}敏珠爾、^{トンコル}東科爾、^{ロンボ・ノモンハン}隆布諾門汗及び^{ウジムチン}烏珠穆沁旗の^{モロム・ラランバ}莫羅木蘭占巴、^{トウメト}土默特左旗の^{チャガン・ディヤンツィ}察罕殿齊、^{サインノヤン}賽因諾顔部の^{ザヤ・バンディダ}咱雅班第達、^{ジェブツン・ダンバ}哲布尊丹巴属下の^{エルデニ・メルガン・バンディダ}額爾德尼默爾根班第達などの、西寧辦事大臣管轄区域及び漠南・漠北等のモンゴル地域における諸呼圖克圖の呼畢勒罕を認定した経緯を把握することができるようになった。筆者は上述の事実を明らかにしたうえ、一步進んで、モンゴル地域における諸呼圖克圖の呼畢勒罕認定のプロセスと特徴を検討したい。

清代雍和宮における金瓶掣籤

—雍和宮檔案を中心として—

阿音娜（李 曼寧訳）

キーワード：清代、金瓶掣籤、雍和宮、雍和宮檔案

前書き

乾隆末年、廓爾喀（Tib. gorkha）戦争が終了しようとしていた際、清朝廷が拉薩の大昭寺（Tib. gtsug lag khang ツクラカン〈*訳者注：通称「トゥルナン寺」〉）と北京の雍和宮において、各々金瓶一つを設置し、それ以降の蒙蔵地域の呼圖克圖（Mon. quduytu、「胡圖克圖」とも）の呼畢勒罕（Mon. qobilyan、「呼必勒罕」「呼弼勒罕」などとも）は、金瓶掣籤（Tib. gser bum skrug pa セルプムトゥクパ）により認定することを定めた〈*訳者注：呼圖克圖、「転生活仏」「聖人」「長寿者」等の意があり、もともとはモンゴル地域におけるチベット仏教の大活仏に対する呼称であり、後に清政府が蒙蔵地域の最高位の活仏に与える称号として使われるようになった。いわゆる活仏の系統の中では、地位上はダライ・ラマとパンチェン・エルデニだけに次ぐ。「胡圖克圖」とも音写する。呼畢勒罕は「転生」「化身」の意であり、活仏の転生者を指す〉。関連する先行研究では、大昭寺及び布達拉宮（Tib. rtse po ta la）における金瓶掣籤の実施状況に対してかなり具体的・深層的な検討がある⁽¹⁾が、金瓶掣籤の雍和宮での実施事情に関しては、史料の欠失に制限され、今に至っても明らかになっておらず、関連する先行研究では簡単に触れられただけで、その具体的な歴史的経緯については説明されていなかった⁽²⁾。今中国第一歴史檔案館に保存されている雍和宮満・漢・蒙文檔案史料の公表⁽³⁾は、我々がこの問題をより深く研究するに資する一定の事例を提供してくれた。本論は、漠南・漠北モンゴル及び西寧辦事大臣管轄区域内の数名の

(1) 主要先行研究：柳陞祺・鄧銳齡「清代在西藏實行金瓶掣籤的經過」『民族研究』1982 年第 4 号。廖祖桂・陳慶英・周煒「論清朝金瓶掣籤制度」『中國社會科學』1995 年第 5 号。恰白・次旦平措等著、陳慶英等訳『西藏通史——松石寶串』、西藏古籍出版社、1996 年初版、2008 年第 3 版。陳慶英「清代金瓶掣籤制度的制定及其在西藏的實施」『西藏民族學院學報』2006 年第 3、4、5 号。

(2) 金鋒整理注釈『küke qota-yin süm-e keyid』（蒙文）、内蒙古人民出版社、1982 年、103 頁、155 頁、191 頁、201 頁、220—221 頁、225 頁。

(3) 中国第一歴史檔案館・雍和宮管理處共編『清代雍和宮檔案史料』（1—24 冊）、中国民族攝影藝術出版社、2004 年。以下『雍和宮檔』と略称。

呼圖克圖の呼畢勒罕の掣定経緯⁽⁴⁾を考察することを通して、金瓶掣籤制度が雍和宮において実施された具体的事情を検討する。〈*訳者注：本論における固有名詞の漢字表記は、同形異字の混同を避けるために、基本的に正字を使用する。また、蒙蔵地域の人名・地名等は、元言語が確認しかねる場合が多いため、基本的には漢字表記にし、元言語が確認できるものはルビを振る〉

一、雍和宮金瓶掣籤制度の成立

モンゴル地域の活仏転生制度は、チベット地域における関連の慣例に基づいて展開し発展してきた。そして、清代のモンゴル地域における活仏転生は、漠南・漠北モンゴルのある高僧たちから始まったのである。例えば、額魯特部出身の内齊托音^{ネイチトイン}一世は、17世紀初めに漠南モンゴル地域に来て伝教し、雍正初年に入寂した。第二世の内齊托音^{ネイチトイン}の転生経緯はその伝記において次のように記されている。

彼は、天〔命〕を承り運を開いた聖武なる成吉思汗^{チンギス・ハン}の弟——君主哈薩爾^{カサル}の後裔であり、明安兀魯思諾顔^{ミンガンオロスノヤン}の門より生まれた。その父は幹齊爾台吉^{オ・チルタイジ}であり、その母は阿迪思^{タイジ}である〈*訳者注：台吉はモンゴル貴族の爵位称号〉。彼は辛亥の年（1671、清・康熙十年）八月一日の暁に誕生。彼が出生すると、「我、打座する！」と称し、また「上座に座る！」と言った。その母が懐妊し始めた時、夢の中で、衆僧がドラや鼓を打ち、誦経して沐浴するのを見た。（中略）彼が三歳の時、その祖父に対し、「あなたは内齊^{ネイチト}であり、私は小内齊^{ネイチ}である。まさに率先して誦経すべし」と言って、そのまま『無險歸依經』『發心經』『不可思議經』⁽⁵⁾を誦み始めた。

前代内齊托音^{ネイチトイン}の弟子——土默特^{トウメト}の察罕畢力克圖^{チャガン・ビリグト}禪師がチベットに赴き、このことをパンチェン・エルデニと護法神（Tib. chos skyong チューキョン、漢字音写は「吹忠」など。「護法」とも）等に報告した。パンチェン・エルデニ等はその転生を許可し、転生靈童の父母の名前及び〔所在する〕方位を明示した。これで、内齊托音の弟子たちがパンチェン・ラマ等の指示に従って靈童を見つけ、靈童は前代〔所持〕の釈迦牟尼像等の物品を見出した。その後、〔諸事情を〕皇帝に奏上して報告し、皇帝は「若し汝ら弟子たち

⁽⁴⁾ 『雍和宮檔』によれば、拉薩「四大林（四大寺院）」活仏の一つとしての策墨林阿旺楚臣一世の転生者も雍和宮金瓶において掣定されたのである（「駐藏辦事大臣和寧奏報達賴喇嘛等為掣定薩瑪第巴克什呼畢勒罕謝恩事摺（嘉慶五年九月八日）」満文、『雍和宮檔』第十六冊、第243—242頁）。『八世達賴喇嘛傳』（中国藏学出版社、2006年）248頁〔にある記述〕もこの出来事を裏付けた。

⁽⁵⁾ 達磨三諾陀羅著、烏力吉圖訳「内齊托音二世傳」『清代蒙古高僧傳譯輯』、全国圖書館文献縮微複製中心、1990年、第169—170頁。

と檀越（即ち施主）たちが確信し、疑いがなければ、本寺に迎えよう」⁽⁶⁾と諭旨を下した。

その外、清代の漠北の喀爾喀地域における最大な活仏は哲布尊丹巴（Tib. rje btsun dam pa）呼圖克圖である。哲布尊丹巴一世は、清とモンゴルの準噶爾部と戦争した際、喀爾喀諸部を率いて清に帰属した功労を有し、康熙帝の時代において—漠南の多倫諾爾や北京に何度も行ったことがあり、雍正元年に入寂した。我々は『哲布尊丹巴傳』の中から、その転生と認定された経緯を捉えることができる。

額駙の達爾罕親王が、自分の念珠の大珠と親指の第一節が金剛菩薩に化したという夢を見た。その妻の査幹達拉も夢の中で、温都爾格根（即ち哲布尊丹巴呼圖克圖一世）がその庭に入り、後に室内に入ったことを見た（*訳者注：額駙、清代皇女の夫の爵位。温都爾格根、「至上光明者」の意）。二人は夢の中で、寢屋の中に黄色い光が現われることを何度も見て、坂の上に百花が満開するのを見た。所々良い兆候であった。第二世の哲布尊丹巴が出生する直前、その母の頂には白い光が現われ、渾身が光っているように映え輝かれていた。木龍年、即ち雍正二年二月一日の暁、哲布尊丹巴二世が誕生した。すぐさま五色〔の光〕が爛漫にまじり合って、種々の奇瑞が現われた。皆が此れを見て非常に驚き、声を揃えて祈祷した。〔喀爾喀使者が〕四名の幼児の姓名を記して、急いでチベットに赴き、諸博格達と法主に報告した。以て誰かが本当の転生靈童であることを確定する。諸博格達と法主は「達爾罕親王額駙の子は氏族が高貴たり」という法旨を下した。喀爾喀使者がチベットに赴いた際、雍正帝の夢の中で、哲布尊丹巴呼圖克圖一世が謁見を求め、〔雍正帝に〕告げて曰く、「我は既に転生した。即ちあの四人目の幼児、額駙の妾の子なり」と言った。その後、雍正帝が次の諭旨を下した。「朕は夢の中で老呼圖克圖と出会い、〔彼は〕朕に対して、額駙の長男として転生したと告げた。あの幼童はまさに呼圖克圖なるべし。〔このことは〕西方の諸博格達と法主が言った、第四額駙（即ち達爾罕親王）の子は氏族が高貴たることに一致し、当然彼を坐床させるべきである」。⁽⁷⁾

以上の二人の高僧の転生資料は、漠南・漠北モンゴル地域における活仏転生の基本的事実をいくらか示している。その外、我々は散在している些細な記述からも、金瓶掣籤制度が確立する前の、甘肅・青海地域のチベット仏教のある高僧たちの転生事情はわかる。例えば、嘉木様（Tib. 'jam dbyangs）活仏は拉布楞寺（Tib. bla brang bkra shis 'khyil）の寺主である。嘉木様一世が入寂した後、彼の転生——第二世の嘉木様活仏の認定経緯

⁽⁶⁾ 達磨三諾陀羅著、烏力吉圖訳「内齊托音二世傳」『清代蒙古高僧傳譯輯』、全国圖書館文献縮微複製中心、1990年、第173—174頁。

⁽⁷⁾ 申曉亭・成崇徳訳注「哲布尊丹巴傳」、『清代蒙古高僧傳譯輯』、第236頁。

は史書の中に簡略的な記述がある。

第十二回の巡りの土猴年（1728、雍正六年）に、^{ジヤムヤン}「嘉木様二世が」種々の祥瑞に伴って降誕し、「仁欽喀」と名付けられた。（中略）彼が十三歳の時、伯父の^{トシコル}東科爾（Tib. stong 'khor）^{マンジュジュリ}曼珠室利活仏のもとで沙弥戒を受け、「阿旺絳央赤列堅贊貝桑布」という法名が付けられた。両部学識を学習し、^{トシコル}東科爾活佛から獨雄大威徳金剛灌頂を受け、且つ完全に体得した。さらに文殊言教の講釈や作明母随許法等の多くの教法を聴聞して拝受した。彼が十六歳の時、^{ラモ}拉摩護法、^{ネーチュン}乃窮護法、^{ガドレン}噶哇冬護法等によって、^{ジヤムヤン}嘉木揚・^{ジェベ・ドルジェ}協貝多吉活仏の転生であると認定され、^{ラブラン}拉布楞寺に迎えられて坐床した。⁽⁸⁾

これ以外、ほかの部分蔵、満文史料の中には、また、雍正初年頃の^{チャンキヤ}章嘉（Tib. lchang skya）呼圖克圖二世⁽⁹⁾と乾隆五十年代の^{ゴマン}果莽寺（Tib. sgo mang）の^{ミンドル}敏珠爾（Tib. smin grol）呼圖克圖⁽¹⁰⁾の呼畢勒罕認定の経緯が記されている。さらに、歴代のダライ・ラマとパンチェン・エルデニの呼畢勒罕の認定経緯の記述とを合わせて考えれば、我々は大体金瓶掣籤制度が確立する前の呼畢勒罕認定のプロセスを以下のいくつかの段階にまとめることができる。まず、母親が懐妊した時と「呼畢勒罕が」誕生した時、あるいは新・呼畢勒罕の父母に夢告し、あるいは黄色いまたは白い光を放ち、多くの様々な瑞兆が現われた。それに、新・呼畢勒罕が出生した後、聡明超人で、すぐに誦経できること、または前代の活仏の物品を見分けられることなどができた。第三、ダライ・ラマやパンチェン・エルデニ、または護法神や皇帝の承認を得て、本寺に迎え入れられ坐床儀式を行った。

次に、金瓶掣籤制度の制定経緯を考察する。乾隆五十七年七月、清内務府造辦處によって金奔巴瓶（Tib. gser bum セルプム〈*訳者注：「gser」は「金」の意で、「bum」は「瓶」の意である〉）を作り始め、九月の初めに一つを完成した。それに続けて、同じ形でもう一つを作り、十月二十六日に雍和宮に祀られた⁽¹¹⁾。金奔巴瓶は乾隆帝が自ら監督して製作させたのである⁽¹²⁾。五十七年九月初、乾隆帝が侍衛二人を遣わし、金奔巴瓶を^{ラサ}拉薩

⁽⁸⁾ 固始噶居巴・洛桑澤培著、陳慶英・烏力吉訳注『蒙古佛教史』、天津古籍出版社、1991年、第103頁。

⁽⁹⁾ 土觀洛桑卻貝尼瑪著、陳慶英・馬連龍訳『章嘉國師若必多吉傳』、中国藏学出版社、2007年。

⁽¹⁰⁾ 「駐西寧辦事大臣奎舒奏報認定敏珠爾呼圖克圖呼畢勒罕情形事摺（乾隆五十五年十月初四日）」、満文、『雍和宮檔』第十四冊、第197－195頁。（※満文檔案文書の頁数は後ろから数える）

⁽¹¹⁾ 青海の塔爾寺においては、金瓶が設けられてあると示す情報もある（『元以來西藏地方與中央政府關係檔案史料彙編』5（中国藏学出版社、1994年、第2203－2204頁）に見る）が、確認する必要がある。

⁽¹²⁾ 「乾隆五十七年各作成做活計檔」中国第一歴史檔案館、香港中文大學文物館共編『清宮

に送った。二人は十一月二十日に到着し、金奔巴瓶が盛大に且つ厳かに迎え入れられ、大昭寺内に祀られた⁽¹³⁾。

乾隆五十七年八月二十三日の詔書の中には、次のように述べられている。「^{ラ・モ・チュウ・キョン}拉穆吹忠 (Tib. la mo chos skyong、即ち拉穆 (拉摩) 護法) 四名に命じ、法をなし降神をして呼畢勒罕を見出させ、[名籤を] 京より送っていった金奔巴瓶内に入れて、ダライ・ラマ等に命じ、駐藏大臣と立ち会って掣定し、詳しく奏上して『呼畢勒罕』にする」⁽¹⁴⁾。雍和宮檔を調べて、乾隆五十七年八月に諭旨があった。「今後、例え諸モンゴル地方が恭敬している呼圖克圖等が入寂して、呼畢勒罕を指定する時は、これもチベット地域のように、四名の^{チュウ・キョン}吹忠 (護法) が^{ルン・テン}隆丹 (Tib. lung bstan 予言) をして靈童数名を指摘し、彼らの姓名及び生年月日を写して金瓶に入れ、ダライ・ラマ及び駐藏大臣等が監督して掣定する。いつも通りに、恭敬されている呼圖克圖の呼畢勒罕は[すべて] 部族の^{ジャ・サ・ク}札薩克 (Mon. jasad, 「札薩克」とも) 王公の子孫の中から誕生することはすべからず」⁽¹⁵⁾。このことから、乾隆帝は最初、^{ラ・サ}拉薩の金瓶内でモンゴル地域の呼圖克圖の呼畢勒罕を掣定すると考案していた。

乾隆五十七年十月、雍和宮において金瓶を祀られた同時に、乾隆帝はまた『御製^{ラ・マ}喇嘛説』(以下『喇嘛説』と略称)を頒布した。乾隆帝が『喇嘛説』の中に、清朝のチベット仏教政策及びその間に現れた問題点と推進しようとする対策を説明した。ここでは、乾隆帝が以前の言説を改め、雍和宮の金瓶内でモンゴルの内外札薩克の「大呼畢勒罕」を掣定しようとした(※訳者注：大呼必勒罕、重要な活仏の転生者)。乾隆帝の考えによれば、「黄教を興ずることは、即ち以てモンゴル諸部を安ずることである。関係するところが大きい故に、これを保護しなければならない」。ただし、「誕生する呼必勒罕はすべて一族より出自するとすれば、これは世襲の爵祿とは如何に異なるのか」。「ついでに、モンゴル内外の各札薩克が供養している大呼必勒罕は、最近もまた各々の諸王公家の子弟の中で転生した者がある」。「追伸、諸モンゴルの大呼必勒罕についても、理藩院に命じ、公文を発行させ、新たに制定したチベット内の例のように、報告される呼必勒罕の名前を雍和宮の仏前に安置し祀られた金奔巴瓶内に入れておき、理藩院堂官が掌印する^{ジャ・サ・ク・ダー・ラマ}札薩克達喇嘛等と立ち会って共同で掣籤せよ。これで、もしくは「真」の傳承を得、よって紛糾競争を鎮めることができる」⁽¹⁶⁾(※訳者注：^{ジャ・サ・ク・ダー・ラマ}札薩克達喇嘛、清代の僧職

内務府造辦處檔案總彙』53 冊、第 96—97 頁、人民出版社、2005 年。王家鵬「清宮藏有關“金瓶掣籤文物析”」、『文物』1995 年 3 号。

⁽¹³⁾ 『衛藏通志』卷五「喇嘛」、『西藏志 衛藏通志』合刊、西藏人民出版社、1982 年。

⁽¹⁴⁾ 鄧銳齡「清乾隆五十八年(1793)藏内善後章程的形成經過」、『中國藏學』2010 年第 1 号。

⁽¹⁵⁾ 「上諭爲著設立金奔巴瓶掣定大呼圖克圖呼畢勒罕事(乾隆五十七年八月二十九日)」、滿文、『雍和宮檔』第十四冊、第 355—352 頁。

⁽¹⁶⁾ 『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本彙編』第 76 冊、第 37—40 頁、中州古籍出版社、1989 年。

名・称号の一つで、主に京城またはモンゴル主要寺院に駐在する。ふつうは呼圖克圖によって務める。札薩克達喇嘛に次いで、札薩克喇嘛、達喇嘛、副達喇嘛、德木齊（得木齊）、格斯貴などがある）。当時、雍和宮において碑を立て石を刻み、『喇嘛説』を撰することの一つの主要目的は、当然のことで、金瓶掣籤で呼畢勒罕を認定する制度を公表するためであった。

廓爾喀戦争がまもなく終了しようとしていた際、乾隆帝がチベット内外に現れた問題を鑑みて、相当長時間にわたり、前蔵（*訳者注：拉薩を中心とする地域。衛（dbus）地方とも）にいる福康安や和琳等の大臣たちと討論し、様々な多くのチベット善後処理策を定めた。金瓶掣籤制度も、そのなかの一つとして公表されたのである。乾隆帝五十七年十一月丙午、「また諭して、チベット内の善後諸事につき、福康安等が共同で勘案して定め、すべてはすでに立法し実行することができるようになっている。（中略）また、先般発送していった金奔巴瓶は、もとよりは「呼畢勒罕」を掣定する用であるが、当所の大呼圖克圖が転生するまで待つて試行する必要がない。もし今現在チベット内で、いずれの呼圖克圖〔の入寂〕に応じて呼畢勒罕が出現すれば、即ち先行して金奔巴瓶で掣籤すべし。このように数回処理して規則を定めた後、当所の僧俗人等は共に遵守して、将来、大呼圖克圖が転生することにあえば、その規則の通りに掣籤すれば、より人々の崇敬の心を固めることができる。そして、以前の〔活仏位を〕私的に伝襲する積弊もまた騒ぎ立てずに、以て取り除くことができる」（¹⁷）。

以上の諭旨は、まずは掣籤を試行しようとすることの法的依拠である。乾隆五十八年二月に至り、福康安等が最初の掣籤を試行する靈童候補者数名を見つけた。彼らの名前は、西寧と内扎薩克哲里木盟の科爾沁地方より前蔵の拉薩まで送られ、二月十一日に、大昭寺において掣籤を行った。福康安等の奏摺は、今回の金瓶掣籤の経緯を詳しく報告した。この奏摺の最後の部分には、また、今回の試行掣籤でモンゴルと西寧地域の呼畢勒罕を選定したことに対し、一つの説明をした。

先般承った諭旨を再び確認し、諸モンゴル地方所出の呼畢勒罕はすべて雍和宮に設立された金本巴瓶内で掣籤するという。今回は、この数名の呼畢勒罕〔候補者〕は既にチベット内に送っており、臣等は諭旨を遵守し、すぐさま掣籤を試行した。今後のことについて、西寧地方は比較的にチベットに近いので、そこ所出の呼畢勒罕〔の名籤〕は依然として最寄りのチベットに送って、瓶に入れて籤を引く。それ以外の各モンゴル地方所出の呼畢勒罕は、すべて理藩院によって公文を出し、彼等の名前を京に送らせて、雍和宮の金本巴瓶内で掣籤して、以て真偽を識別する。（¹⁸）

⁽¹⁷⁾ 『清實録』巻 1416、乾隆五十七年十一月丙午。『乾隆朝上諭檔』17、廣西師範大學出版社、2008 年、第 305 頁。

⁽¹⁸⁾ 「福康安奏報西寧及科爾沁等地送到各呼畢勒罕遵旨入瓶試掣事摺（乾隆五十八年二月十

理藩院の議復檔案は伝わってこなかった。とはいえ、その後まもなく行った初回の雍和宮金瓶掣籤の事例から見れば、当時は、理藩院堂官及び京城掌印扎薩克達喇嘛（Man. *doron jafaha jasak da lama*）等の参与によって、漠南・漠北モンゴル地域の呼畢勒罕を認定するプロセスは大体確定してきた。まさにこの時、喀爾喀において、賽因諾顏部の額爾德尼班第達（*Mon. erdeni bandida*）呼圖克圖の呼畢勒罕の不正転生事件が起こり、土謝圖汗の車登多爾濟は汗の爵位が剥奪され、額爾德尼班第達呼圖克圖の商卓德巴である那旺達什が河南省に流された。乾隆五十八年三月戊申の上諭は次のように述べた。

諸モンゴル地方の昔から居ていた、諸旗・部族が供養されている呼圖克圖が甚だ多い中、大・小が異なっていて同じではない。もし一括してチベットに行かせて、ダライ・ラマに任せて、駐蔵大臣と共同で掣籤させるのは、煩いを免れないだけではなく、道もはるかに遠い。諸モンゴルの力で困難であることを念じて、よって京城の雍和宮内においても金奔巴瓶一つを設ける。もし、モンゴル地方において、呼畢勒罕が現われれば、即ち理藩院に報告し、〔出生〕年月、姓名を籤の上に写し、瓶内に入れ、掌印扎薩克達頼喇嘛⁽¹⁹⁾呼圖克圖等に渡し、仏前で誦経して、理藩院堂官と共同で掣籤するように任せる。それ以前の、王公子弟内で私的に呼畢勒罕とする悪習は永く停止せよ⁽²⁰⁾。

この論旨は二点を強調した。一つは、それ以降のモンゴル地方の呼畢勒罕の認定は前蔵に行くべからず、雍和宮の金瓶内でしか掣定できない。二つは、王公子弟内で、呼畢勒罕を私的に選定する悪習を禁止する。これによれば、雍和宮の金瓶掣籤制度は、一括で制定、公表、実施したのではなく、乾隆五十七年十月に基本条例を公表した後、また続々と補充と修訂を施し、五十八年下半期の時に至ってはじめてほぼ確定したのである。

額爾德尼班第達呼圖克圖の呼畢勒罕を選出・認定した時は、土謝圖汗の息子の靈童資格を取り消した後は、数回の選別を経て最終的に五名の靈童を選出した。乾隆五十八年三月二十四日、皇帝が雍和宮の金瓶内で掣定するように命じた。これは、雍和宮において実施された最初の金瓶掣籤の事例であった⁽²¹⁾。乾隆五十八年四月一日の上諭、
「額爾德尼班第達呼圖克圖の呼畢勒罕を指定するための件。奎舒等に命じて、探し得た

三日）」、漢文、『雍和宮檔』第十五冊、第 28－29 頁。『衛藏通志』卷五「喇嘛」。

(19) ここの史料に誤りがあり、「掌印扎薩克達喇嘛」であるべきである。

(20) 『清實錄』卷 1424、乾隆五十八年三月戊申。「密寄駐藏辦事尚書和琳著嗣後掣籤認定各呼畢勒罕（乾隆五十八年二月初八日）」、滿文、『雍和宮檔』第十五冊、第 27－21 頁。「上諭爲蒙古番子地區呼圖克圖呼畢勒罕于雍和宮金奔巴瓶掣定等情事（乾隆五十八年三月十五日）」、『雍和宮檔』、滿蒙文、第十五冊、第 126－94 頁。

(21) 「上諭爲額爾德尼班第達呼圖克圖呼畢勒罕著以雍和宮金本巴瓶掣定事（乾隆五十八年三月二十四日）」、滿文、『雍和宮檔』第十五冊、第 158－157 頁。

兒童五名の姓名を籤の上に写し、雍和宮に祀られている金本巴瓶の中に入れて、諸呼圖克圖喇嘛等に三日間誦經させた。四月一日、仏像の前で、喀爾喀俗人莎畢伊特格勒の息子齊旺扎布を引き出した。諸呼圖克圖等が信を至り誠心に祈祷し、三日間誦經をして、本月一日の晴れの日で齊旺扎布の名前を引き出したことは、これ祥瑞なり。朕は甚だ慰樂を感じている。それでは、齊旺扎布を額爾德尼班第達呼圖克圖の呼畢勒罕にせよ」⁽²²⁾。

乾隆五十八年八月の時になると、皇帝からはまた諭旨があった⁽²³⁾。今後、諸モンゴル地方において呼畢勒罕を指定する時、拉穆吹忠によって降神し予言するのを停止し、雍和宮に設けている金奔巴瓶内で掣籤して指定する⁽²⁴⁾。これより、拉穆吹忠等の護法神がモンゴル地域の呼畢勒罕指定のプロセスへの関与が禁止された。ここに至って、「指認呼畢勒罕定制」という『清會典事例』の中の定着制度の一つが成立した。

乾隆五十八年、金瓶掣籤制度が「事例」の形式で定着し、清の歴史的定着制度の一つとなった。これは、乾隆末年に金瓶掣籤制度が次第に確立してきた経緯である。この後の相当長い時間内で、この制度は大きな変化がなかった。道光年間になった時、モンゴル地域に関する関連法令にはもう一箇条が補充された。「道光二年に議して定め、呼畢勒罕を探し得た時は、当旗が印結（*訳者注：印結書、証明書のこと）を添えて〔理藩〕院に提出してから、〔名籤を〕瓶に入れ掣籤することが許される」⁽²⁵⁾。

二、雍和宮における金瓶掣籤の事例

乾隆五十九年、帕巴拉（Tib. 'phags pa lha）呼圖克圖の呼畢勒罕は、大昭寺の金瓶内で掣定された⁽²⁶⁾。これは、チベットの大呼圖克圖の呼畢勒罕が初めて金瓶掣籤を実施した事例である。それ以降、皇帝の許可を得て掣籤が免除された個別の者を除き、チベットの歴代のダライ・ラマ、パンチェン・エルデニ、摂政（Tib. rgyal tshab ゲルツァブ）活仏と各宗派の主要な呼圖克圖の呼畢勒罕はすべて拉薩において金瓶掣籤による認定を実施した⁽²⁷⁾。では、雍和宮内の金瓶を利用して掣定したのはどれらの呼圖克圖の呼畢勒罕

(22) 「上諭爲掣定額爾德尼班第達呼圖克圖呼畢勒罕情形著遍傳内外札薩克蒙古番子等事（乾隆五十八年四月初一日）」、滿文、『雍和宮檔』第十五冊、第 194—192 頁。

(23) 「寄諭駐藏大臣和琳著將藏地有無出小呼畢勒罕事乘便奏聞（乾隆五十八年五月三十日）」、滿文、『雍和宮檔』第十五冊、第 304 頁。「寄諭駐藏大臣和琳等嗣後凡求吹忠指認呼畢勒罕者重懲不貸（乾隆五十八年八月十四日）」、滿文、『雍和宮檔』第十五冊、第 351 頁。

(24) 『清會典事例』卷 975：相同内容的上諭見「上諭爲蒙古番子地區呼圖克圖呼畢勒罕于雍和宮金奔巴瓶掣定等情事（乾隆五十八年三月十五日）」、『雍和宮檔』、滿蒙文、第十五冊、第 126—94 頁。

(25) 『清會典事例』卷 975。

(26) 「寄諭駐藏大臣松筠著以奔巴瓶掣定帕克巴拉呼圖克圖之呼畢勒罕（乾隆五十九年九月十六日）」、滿文、『雍和宮檔』第十六冊、第 43—41 頁。「寄諭四川總督和琳等著將指定帕克巴拉呼圖克圖呼畢勒罕各情速奏（乾隆五十九年十月初四日）」、滿文、『雍和宮檔』第十六冊、第 45—44 頁。

(27) 個別のチベットの僧侶が特別事情によって雍和宮金瓶で掣定された事例は、莊吉發「天

であろうか。彼等の認定経緯は、またどのような状況であったのか。以下、雍和宮檔案の中のいくつかの記載を例として⁽²⁸⁾、他の関連史料を合わせて考え、北京雍和宮内で金瓶掣籤を実施した具体的な事情を考察しよう。

(一) 隆布諾門汗^{ロンボ・ノモンハン}四世と東科爾呼圖克圖^{トシコル}七世の呼畢勒罕の掣定

乾隆五十八年二月の上諭、「今後、例え西寧所屬地域の呼圖克圖が入寂し、呼畢勒罕を探す時、依然として任意に処理することは断然禁止する。なるべく三、四名の靈童を選出し、或は駐藏大臣に知らせ、召地（即ちチベット）の奔巴瓶内で掣定し、或は理藩院に報告し、雍和宮の奔巴〔瓶〕内で掣定する。その便利さ、つまり距離の近さ、利便性及び節約性を鑑みて行おう」⁽²⁹⁾。これから見れば、嘉慶初期に至るまで、西寧辦事大臣に管轄される区域内の呼圖克圖の呼畢勒罕認定は、法令上でいうと、^{ラサ}拉薩と雍和宮はともに金瓶掣籤認定をすることができる。

嘉慶七年十一月、西寧辦事大臣の報告によると、前代の隆布諾門汗^{ロンボ・ノモンハン} (Tib. rong po no mon han) が乾隆五十九年に入寂した。その後、靈童二名を見つけて、理藩院に報告し、雍和宮の金奔巴瓶内で掣定しようとした。隆布諾門汗はまた「隴布諾捫汗」や「隆務諾捫罕」などと漢訳され、その転生は青海同仁県にある隆務寺^{ロンボ} (Tib. rong bo'i dgon chen) の創建者桑丹仁慶^{サムタン・リンチェン}に遡ることができる。桑丹仁慶は元代の高僧であり、康熙帝の時、彼の転生は夏日阿旺程列嘉措まで伝わった。1697年、夏日阿旺程列嘉措がチベットに赴き、哲蚌寺^{デブン} (Tib. 'bras spungs dgon pa) に入って經典を学び、ダライ・ラマから諾捫罕の称号を得た。1734年、彼は隆務寺において密宗学院を創建した。その転生の呼畢勒罕は根登程列拉傑であり、乾隆五十九年に入寂した。根登程列拉傑の呼畢勒罕である洛桑曲扎嘉措^{ロブサン・チュタク・ギャムツォ}は木兔年(1795)に生れ、父は前代章嘉国師^{チャンキヤ}の甥の^{カセン・トゥブテン・ナムゲル}尕藏土丹南傑である⁽³⁰⁾。嘉慶八年十一月の謝恩奏摺から見れば、根登程列拉傑の呼畢勒罕洛桑曲扎嘉措は、確かに雍和宮金瓶内で掣定されたのである⁽³¹⁾。

その外、また前代の東科爾呼圖克圖^{トシコル}が嘉慶三年に入寂し、靈童二名を見つけた。ここで言う東科爾呼圖克圖^{トシコル}は、清代の駐京呼圖克圖の一つである。先行研究によれば、東科爾呼圖克圖六世の名前は^{ジャムヤン・テンジン・ギャムツォ}嘉木樣丹津嘉措(1754–1798)であり、隆務辛勒^{ロブサン・チュタク・ギャムツォ}に生れ、庚辰

高皇帝遠——清朝西陲的邊臣疆吏」(『邊臣與疆吏』、中華書局、2007年)に見る。

⁽²⁸⁾ 『雍和宮檔』序(一)によれば、前後十四回、雍和宮において金瓶掣籤を通して大呼圖克圖の轉世靈童を確認した。

⁽²⁹⁾ 「駐西寧辦事大臣台布奏爲請以雍和宮所奉金奔巴瓶掣定隆布諾門汗及東科爾呼圖克圖呼畢勒罕等情事摺(嘉慶七年十一月十二日)」、滿文、『雍和宮檔』第十六冊、第307–304頁。

⁽³⁰⁾ 智觀巴・貢卻乎丹巴繞吉著、吳均・毛繼祖・馬世林訳『安多政教史』上、甘肅民族出版社、1989年、第292–299頁。

⁽³¹⁾ 「駐西寧辦事大臣都爾嘉奏報囊素喇嘛根敦沙喇布以掣定隆布諾門汗呼畢勒罕代爲謝恩事摺(嘉慶八年十一月二十六日)」、滿文、『雍和宮檔』第十六冊、第346–345頁。

年（1760）に塔爾寺（Tib. sku 'bum byams ba gling クンブム・チャンバリン）で出家した。却蔵土登旺曲に師事し、拉卜楞寺顯宗学院において經典を学んだ。乾隆四十年、彼は北京に赴いて皇帝に謁見し、優遇を受けた。後に、拉薩の色拉寺に赴き、五部大論を専攻した。丙辰年（1784）、色拉寺の麦巴扎倉（*訳者注：經学院）の堪布に任じ、丙午年（1786）に故郷に帰った。次の年、また内地へ赴き、四十五歳戊午年（嘉慶三年）に入寂した。七世の名前は噶桑嘉木様嘉措（1799－1811）であり、阿日（a-rig）首領系統に属する。以上の檔案史料から見れば、彼も雍和宮の金瓶において掣定されたことが推測できる。彼は辛未年（1811）に前蔵に赴き、色拉寺の麦巴扎倉に入って經典を学び、同年十一月に逝去した⁽³²⁾。そして、第八世である呼畢勒罕は、チベットの大理寺に祀られた金瓶内で掣定されたのである⁽³³⁾。

（二）噶勒丹席熱圖呼圖克圖五世の呼畢勒罕の掣定

道光四年十一月、雍和宮金瓶において、西寧密那克地方の番子（満文「fanzi」の漢字音写）吹津の息子喇什が噶勒丹席熱圖（Mon. galdan siregetü）呼圖克圖の呼畢勒罕であると掣定したので、西寧辦事大臣が噶勒丹席熱圖の商卓徳巴である扎薩克喇嘛の代わりに、その師匠〔噶勒丹席熱圖の転生者〕が認定され、坐床儀式を行ったことのための謝恩奏摺を奏上した⁽³⁴⁾。ここで認定されたのは、噶勒丹席熱圖呼圖克圖五世阿旺土登丹白尼瑪であるはずで、彼は塔爾寺属の弥薬族に生れて、当時の察罕諾們汗の直兄弟である。道光初年に北京へ赴いたことがあり、後に塔爾寺で經典を学んだ。道光九年、諭旨を奉じて、紫禁城における騎馬許可を得た（*訳者注：紫禁城内での騎馬許可を与えることは清における特別褒賞の一つである）。道光十八年、諭旨を奉じて、扎薩克達喇嘛と同様な俸銀を給与するように賞された。同年十二月、諭旨を奉じて、副扎薩克達喇嘛に補任され、道光二十六年に亡くなった⁽³⁵⁾。

（三）章嘉呼圖克圖五世・六世の呼畢勒罕の掣定

章嘉呼圖克圖四世（一説十六世）⁽³⁶⁾が入寂した後、道光二十六年七月にて、理藩院が上奏して諭旨を請い、歴代の章嘉呼圖克圖等の高僧が入寂した後の旧例に従い、学問

(32) 若松寛「青海湟源縣的東科爾寺及東科爾呼圖克圖」、『清代蒙古の歴史與宗教』、黒龍江教育出版社、哈爾濱、1994年。

(33) 『清實録』卷38、道光二年七月癸酉；『清實録』卷53、道光三年六月己亥。

(34) 「駐西寧辦事大臣穆蘭岱奏報商卓特巴扎薩克喇嘛以掣定噶勒丹席熱圖呼圖克圖呼畢勒罕請代爲謝恩事摺（道光四年十一月二十九日）」、満文、『雍和宮檔』第十七冊、第388－387頁。

(35) 若松寛「噶勒丹錫呼圖呼圖克圖考——清代駐京呼圖克圖研究」、『清代蒙古の歴史與宗教』、黒龍江教育出版社、哈爾濱、1994年。妙舟法師『蒙藏佛教史』第五篇第三章第一節「噶爾丹錫呼圖呼圖克圖」、江蘇廣陵古籍刻印社、1993年。

(36) 妙舟法師『蒙藏佛教史』に述べられている章嘉系統はさらに13世を遡って追認した。

のある喇嘛に命じて、新しい祈願文を撰して、呼圖克圖の呼畢勒罕が早く転生するように誦經させ、祈祷させた⁽³⁷⁾。

道光三十年宣宗（道光帝）の諭旨があった。「章嘉呼圖克圖が道光二十六年に入寂して以来、既に三年に至り、何故にまだ転生していないのか。これ以上遅らせてはいけない。速やかに〔その転生を〕見つけて〔朕に〕告げ、以て朕の望みを叶えよ」⁽³⁸⁾。そのうえで、章嘉呼圖克圖四世の大弟子森沙巴等を速やかに西寧に遣わし、〔転生者を〕探させた。「この年の三月、彼らが西寧に到着し、西寧欽差大臣喀拉沁のところに来て曰く、諭旨を奉じて章嘉呼圖克圖十六世の弟の超伯森呼圖克圖と一緒に探しに行った。また、前代章嘉呼圖克圖の日常的に使われた鈴杵、念珠及びほかの法器をも持って行って、彼等に識別させた。すぐさま幼児三名が見つかり、共に靈異が顕著であった。西寧欽差大臣が例に従い清朝廷に奏上して、文宗（咸豐帝）⁽³⁹⁾が諭旨を下し、十二月十五日に、雍和宮法輪殿において三日間誦經・礼仏をして、礼（理）藩院大臣満と一緒に金奔巴瓶の中より抽籤し、道光二十九年己酉に生れの、瑞耶巴噶地方の唐古忒（即ちチベット、「唐古特」などとも）族の童朗波の息子、俗名は森哈薩托である者を得て、本当の第十七世章嘉呼圖克圖なる呼畢勒罕とした。十二月十七日理藩院が上奏し、文宗が諭旨を下して請求通りに許可し、十二月二十九日において、森哈薩托を第十七世章嘉呼圖克圖の「真」の呼畢勒罕に定めた。また、転生事由を公文で内外モンゴルの諸旗に周知させ、呼畢勒罕に人骨の念珠を勅賜した」⁽⁴⁰⁾〈*訳者注：人骨念珠、チベット密教の法器、高僧の遺骨で作るという〉。

章嘉呼圖克圖五世は光緒元年到北京で入寂した。章嘉呼圖克圖六世なる呼畢勒罕を見つけるまでにかかった時間はかなり長かった。光緒七年十一月の上諭、皇帝が西寧辦事大臣の奏摺を受けて、見つけた靈童三名の掣籤事を具体的に執行することを理藩院に任せた⁽⁴¹⁾。檔案文書によれば、光緒八年七月に至って、ようやく最終的に新・呼畢勒罕を掣定した。「また調べたところ、章嘉呼圖克圖、阿嘉呼圖克圖、拉果呼圖克圖、南喀呼圖克圖、敏珠爾呼圖克圖などの歴代駐京〔呼圖克圖〕について、彼ら所出の呼畢勒罕は、本院が〔籤を〕雍和宮に祀られている金瓶内に入れて掣定した。この等の事情は檔案にある」⁽⁴²⁾。見つけた靈童三名の姓名を写して雍和宮に祀られている金瓶のなかに入れた

(37) 「理藩院奏爲誦經祈禱章嘉呼圖克圖呼畢勒罕早日轉世事摺（道光二十六年七月二十八日）」、満文、『雍和宮檔』第十八冊、第 221－220 頁。

(38) 妙舟法師『蒙藏佛教史』第五篇第二章第五節。

(39) 道光三十年正月、道光帝が崩御し、咸豐帝が皇位に継ぎ、廟号は「文宗」である。

(40) 妙舟法師『蒙藏佛教史』第五篇第二章第五節。

(41) 「上諭爲著將訪獲章嘉呼圖克圖轉世靈童交理藩院照例辦理事（光緒七年十一月十四日）」、満文、『雍和宮檔』第十九冊、第 117 頁。

(42) 「理藩院奏爲掣定章嘉呼圖克圖呼畢勒罕等情事摺（光緒八年七月二十日）」、満文、『雍和宮檔』第十九冊、第 128－125 頁。

後、掌印扎薩克達喇嘛等が三日間誦經して、光緒八年七月十四日において、大臣阿慶噶等が京城扎薩克達喇嘛と共同で掣定し、羅藏丹森を新しい呼畢勒罕にした⁽⁴³⁾。掣定結果を朝廷に奏上して承認された後、光緒九年正月に、西寧辦事大臣が章嘉呼圖克圖の呼畢勒罕の代わりに謝恩奏摺を上奏した⁽⁴⁴⁾。

(四) 敏珠爾呼圖克圖二十一世の呼畢勒罕の掣定

宣統元年十一月、駐西寧辦事大臣慶恕が上奏して、「雍和宮金瓶内で、麦勒扎薩克台吉齊莫特林増旗の蒙古人安加爾の息子多吉加を引き出し、敏珠爾呼圖克圖の呼畢勒罕とし」、同年十月一日に本寺に迎えて、坐床儀式を行った⁽⁴⁵⁾ことを報告した。奏摺においては、本寺に迎え入れた時間だけが述べられており、具体的な掣籤時間については言及されていない。

敏珠爾呼圖克圖も清代の駐京呼圖克圖の一つであり、妙舟法師の『蒙藏佛教史』によれば、第二十一世の敏珠爾呼圖克圖の法名は「多吉加」であり、光緒三十一年に青海勒地方扎薩克台吉齊莫特林増旗内に転生し、父の名前は「安加爾」である。雍和宮の金奔巴瓶内に入掣され、宣統元年十月一日雍和宮において掣籤し、西寧本寺に迎えられて坐床儀式を行ったという⁽⁴⁶⁾。

(五) 烏珠穆沁親王旗莫羅木蘭占巴綽汗額爾德尼の呼畢勒罕の掣定

光緒二十七年、雍和宮で内扎薩克錫林郭勒盟烏珠穆沁親王旗にある莫羅木蘭占巴(Mon. molom laranba) 綽汗額爾德尼の呼畢勒罕を掣定した。このことに関して伝わってきた檔案記録は非常に詳しい。雍和宮檔案によると、光緒二十七年七月二十五日、錫林郭勒盟長処より理藩院へ文書を提出して、烏珠穆沁親王旗の莫羅木蘭占巴綽汗額爾德尼の呼畢勒罕事を説明した。

本盟烏珠穆沁親王旗署印協理台吉車登多爾濟の報告により、本旗大乘轉輪寺の施呼根喇嘛、呼圖克圖[の分]に入る莫羅木蘭占巴達木林的呼畢勒罕である綽汗額爾德尼は、光緒二十三年三月間に入寂した。当時は大部(理藩部)と盟長に報告して、各々檔案にある。大乘轉輪寺の達喇嘛、得木齊、格斯貴等の報告によれば、この師匠喇嘛の呼畢勒罕は弟子たちの誦經祈祷によって、本旗の巴彥博拉克地方で遊牧居

(43) 「理藩院奏爲掣定章嘉呼圖克圖呼畢勒罕等情事摺(光緒八年七月二十日)」、滿文、『雍和宮檔』第十九冊、第128-125頁。妙舟法師『蒙藏佛教史』第五篇第二章第六節。

(44) 「駐西寧辦事大臣李慎爲轉奏章嘉呼圖克圖呼畢勒罕謝恩事摺(光緒九年正月二十四日)」、滿文、『雍和宮檔』第十九冊、第145-140頁。

(45) 「駐西寧辦事大臣慶恕奏報徒衆爲雍和宮金瓶掣出敏珠爾呼圖克圖之呼畢勒罕謝恩事(宣統元年十一月初七日)」、漢文、『雍和宮檔』第二十冊、第55頁。

(46) 妙舟法師『蒙藏佛教史』第五篇第三章第一節。

住する護衛の唐古忒^{タングート}の息子阿巴里瑪特^{アバリマド}（酉年生まれ、年五歳）を見つけて、また本旗の阿魯哈穆爾^{アルカムール}地方で遊牧居住する護衛の圖博特^{トボト}の息子色博克瑪特^{センボクマド}（酉年生まれ、年五歳）を見つけた。この二子は、天性聡明で穩当であり、且つ歴代が奉った尊仏を識別することができる。この師匠喇嘛の呼弼勒罕は、一体この二子中の誰であろうか、代わりに上奏していただき、[真の師匠に] 会わせていただくよう、懇ろにお願い申し上げる。この等の事由で参上したのである⁽⁴⁷⁾。

提出した文書は続けて、莫羅木蘭占巴系統^{モロム・ラランバ}の転生史を詳しく遡った。

綽罕額爾德尼の前代は、昔当旗に居た莫羅木蘭占巴・洛布桑勒万^{モロム・ラランバ・ロブサン・ロワン}に繋がる。彼はかつてチベットに二十余年間を居住し、経学を学んでいた。よって、国隆寺に住し、経卷の全面的修訂を行った。王の薩達克端多布が皇帝（乾隆帝）の万寿（*訳者注：皇帝の誕生日）を祝うために廟宇を建てた時に至って、彼をそこに住させ、弟子たちと一緒に誦経させた。終に乾隆二十六年、寺院名が賜られて「大乘轉輪寺」という。後に、洛布桑勒万が入寂して、敖汗王旗台吉巴雅爾札布^{バヤル・ツァブ}の息子噶勒桑多布湍^{ガルサン・トブツァン}を見つけてその呼畢勒罕とし、その弟子たちに本廟に迎えられ居住した。噶勒桑多布湍が入寂した後、巴勒陳^{バルチェン}の息子達木林^{ダムリン}を見つけて、章嘉呼圖克圖^{チャンキヤ}と理藩院堂官松連^{ホ・ビルガン}が一緒に掣定してその呼弼勒罕にした。達木林が入寂した後、同治十一年、護印扎薩克喇嘛^{ジャサク・ラマ}が宗室の載鸞、廣寿と一緒に台吉彭楚克の息子綽罕額爾德尼を引き出して、莫羅木蘭占巴^{モロム・ラランバ}の呼弼勒罕にし、その弟子たちに本廟に迎え入れられ居住した。綽罕額爾德尼は光緒九年の時、チベットに赴き經典を学習しようとして、重ねて申請し、路引（*訳者注：身分証明等付きの通行証）を受けることで、[途中の] 西寧に着いたが、脚の病気を患い、歩き続けることができなかったため帰還した。[光緒] 十六年、二十一年他、大部や盟長等処より訓令が下され[駐京喇嘛] 当番を命じられて、都に入り皇帝の尊容を拝見したことがあった。班に入って洞黎経卷を誦すること二回、当番して[皇帝に] 拝見し、貂皮・緞疋を賞された。今は既に入寂して、見つけた二子は、一体誰であるべきなのか。盟長に懇ろに乞いて、大部に転送し上奏していただき、[名籤を] 瓶に入れ、掣籤し指定していただくよう、お願い申し上げる。⁽⁴⁸⁾

(47) 「錫林郭勒盟長阿巴噶扎薩克多羅郡王楊桑爲呈報烏珠穆沁親王旗訪得本旗大乘轉輪寺呼畢勒罕情形事（光緒二十七年七月二十五日）」、漢文、『雍和宮檔』第二十三冊、第 397—398 頁。

(48) 「錫林郭勒盟長阿巴噶扎薩克多羅郡王楊桑爲呈報烏珠穆沁親王旗訪得本旗大乘轉輪寺呼畢勒罕情形事（光緒二十七年七月二十五日）」、漢文、『雍和宮檔』第二十三冊、第 397—398 頁。

これは錫林郭勒盟長が提出した漢文文書である。彼が提出した元文書の蒙文文書の内容と比べて見れば、漢文文書の方は削除された部分が多くあり、その中の一部分は非常に重要な内容である。例えば、その一世の洛布桑勒万^{ロブサン・ロワン}が入寂した後のことについて、漢訳稿は、「後に洛布桑勒万^{ロブサン・ロワン}が入寂し、敖汗王旗の台吉巴雅爾札布^{タイジバヤル・ツァブ}の息子噶勒桑多布湍^{ガルサン・トブツァン}を見つけて、その呼畢勒罕とした」⁽⁴⁹⁾と述べている。しかし、我々が蒙文の元文書を調べて比較してみると、元文書の内容がより豊富であることがわかる。元文書は次の内容を述べた。洛布桑勒万^{ロブサン・ロワン}が病死した後、「その呼畢勒罕を探すために、チベットに赴いてダライ・ラマ^{ラモ・チュウキョン}や拉穆吹忠^{マム}等に尋ね、敖漢王達欽旗台吉巴雅爾札布^{バイヤル・ツァブ}の息子噶勒桑^{ガルサン}・多布湍^{トブツァン}は洛布桑勒万^{ロブサン・ロワン}の呼畢勒罕であることを知り、唐古特文書を頒布した。乾隆五年、当所はこの事を大院（理藩院）に報告した」。嘉慶六年、噶勒桑多布湍^{ガルサン・トブツァン}が經典を学びに前蔵に赴いた。彼は優秀な成績を獲得し、パンチェン・エルデニはそれを賞するために「莫爾根堪布」号を授けた。道光六年彼が入寂した。後に、道光十一年に理藩院に報告され、雍和宮金瓶内で掣定して、達木林^{ダムリン}をその呼畢勒罕とした。道光二十七年、達木林^{ダムリン}がチベットに赴き經典を学んだ。成績が優れたので、パンチェン・エルデニから「諾木齊莫爾根堪布」号を得た⁽⁵⁰⁾。これらの記述から見れば、金瓶が設置された以前、内モンゴル地域の活仏も、拉穆吹忠^{ラモ・チュウキョン}の降神を通して呼畢勒罕を認定したのである。乾隆末年に、金瓶掣籤制度が押し出されてから、この活仏の歴代の呼畢勒罕はすべて雍和宮金瓶を通して掣定されたのである。

このほか、関連する檔案文書の中からはもう一つの情報が窺える。呼畢勒罕の認定は、以前より一つの手続きが多くなった。即ち、当旗または当該活仏の商卓德巴^{シャンゾドバ}のところから、印結書を発行して提出する必要があったということである。今回の烏珠穆沁^{ウジムチン}の莫羅木蘭占巴^{モロム・ラランバ}の印結書は下記の通りである。

錫林果勒盟烏珠穆沁札薩克和碩車臣親王索諾木喇布坦旗の護印協理台吉車凌旺濟勒が印結〔書〕を提出すること。本旗において昔から居た大乘轉輪寺施呼根喇嘛、呼圖克圖^{フトクト}の分に入る者で、莫羅木蘭占巴^{モロム・ラランバ}綽罕額爾德尼の呼畢勒罕において見つけた二子は、天賦が秀逸で、且つこの喇嘛歴代に供養された尊仏を明確に識別することができて、誠に靈異あり。応じて、札薩克印結を加えて提出し報告をする。⁽⁵¹⁾

(49) 「錫林郭勒盟長阿巴噶扎薩克多羅郡王楊桑爲呈報烏珠穆沁親王旗訪得本旗大乘轉輪寺呼畢勒罕情形事（光緒二十七年七月二十五日）」、漢文、『雍和宮檔』第二十三冊、第 397—398 頁。

(50) 「錫林郭勒盟長阿巴噶扎薩克多羅郡王楊桑爲呈報烏珠穆沁親王旗訪得本旗大乘轉輪寺呼畢勒罕情形事（光緒二十七年七月十九日）」、蒙古文、『雍和宮檔』第二十三冊、第 406—400 頁。

(51) 「錫林郭勒盟長阿巴噶扎薩克多羅郡王楊桑爲呈報烏珠穆沁親王旗訪得本旗大乘轉輪寺呼畢勒罕情形事（光緒二十七年七月十九日）」（甘結）漢文、『雍和宮檔』第二十三冊、第 399

光緒二十七年十一月、理藩院典属司が「臣等が詳しく確認して例に相違なく、謹んで当該二子の名を籤に写し、臣宗室寿が先日護理喇嘛印務札薩克喇嘛の丹畢窩系爾と一緒に、籤を雍和宮に祀られる金本巴瓶内に封入して上記の喇嘛等に渡し、三日間誦経させた。臣宗室會は三日目に、例の札薩克喇嘛の丹畢窩系爾と立ち会って、護衛唐古忒の息子阿巴里瑪特を引き出した。よって、莫羅木蘭占巴綽汗額爾德尼の呼畢勒罕にすると請求する」と奏上して、「了解した」という朱批と承った⁽⁵²⁾。ここに至って、莫羅木蘭占巴綽汗額爾德尼の呼畢勒罕は朝廷の承認を得て、その後は本寺に迎えて坐床儀式を行うだけである。

(六) 卓索圖盟土默特左旗察罕殿齊呼圖克圖の呼畢勒罕の掣定

卓索圖盟長のところより、土默特左旗の察罕殿齊 (Mon. Čayan diyanČi) 呼圖克圖の転生靈童二名を見つけたという報告が届いた後、理藩院が皇帝に奏上した。当該奏摺はおそらく下書きである。檔案文書には日付がない。『清實録』の中で、檔案史料中に現れた「土默特郡王銜多羅貝勒色凌那木濟勒旺宝」と「喀喇沁輔國公僧格札布」を探してみれば、当該檔案文書の作成年代は光緒二十年以降であるべきことは推定できる。檔案文書よりはまた、探し出した転生靈童二名の基本情報が分かる。「土默特郡王品級札薩克多羅貝勒色凌那木濟勒旺布旗の察罕殿齊呼圖克圖が入寂した後、彼の弟子たちは、哲理木盟科爾沁達爾漢親王旗の頭等台吉烏爾土那蘇圖の息子色博克尼瑪 (今年六歳) と、我等土默特郡王品級多羅貝勒色凌那木濟勒旺布旗の四等台吉達里扎布の息子雅什達林 (今年七歳) を探し出した」。〔卓索圖盟長処〕この事情を理藩院に報告して、理藩院堂官と掌管京城喇嘛印務の札薩克達喇嘛等と一緒に雍和宮金瓶内で呼畢勒罕を掣定するのを準備するため、論旨を請求した⁽⁵³⁾。檔案には、今回の掣定結果が記されていないかった。

固始噶居巴・洛桑澤培の『蒙古佛教史』の記述によれば、察罕殿齊は博克達額齊格喇嘛内齊托音一世の弟子であり、彼は卓索圖盟の蒙古爾津旗にある三つの静修地において専念して修行したのは十八年にも及び、殊勝なる証悟を得た大徳となり、蒙古爾津寺、即ち瑞應寺を建立した。彼の転生者は顯宗学院と密宗学院を建てて、仏法を広く弘めた⁽⁵⁴⁾。

(七) 賽因諾顏部咱雅班第達呼圖克圖の呼畢勒罕の掣定

雍和宮檔案文書においては、喀爾喀の呼圖克圖たちの転生資料でもある程度保存して

頁。

(52) 「奏爲掣定錫林郭勒盟烏珠穆沁親王旗莫羅木蘭占巴綽汗額爾德尼呼畢勒罕事摺稿 (光緒二十七年十月)」、漢文、『雍和宮檔』第二十三冊、第 395—396 頁。

(53) 「奏爲掣定卓索圖盟土默特左翼旗查罕典齊呼圖克圖呼畢勒罕事摺」、滿文、『雍和宮檔』第二十三冊、第 408—406 頁。

(54) 『蒙古佛教史』、第 114—115 頁。

きた。例えば、光緒三十三年から三十四年にかけて、雍和宮金瓶において賽因諾顔部の
 咱雅班第達 (Tib. *zay-a bandida*) 呼圖克圖の呼畢勒罕を掣定した。光緒三十年二月、
 賽因諾顔部の咱雅班第達呼圖克圖衮布札布が入寂し、当時理藩院に報告して、[理藩院
 は] その商卓徳巴に命じて呼圖克圖の呼畢勒罕を探させた。商卓特巴の車伯克多爾濟が
 靈童二名を見つけたと報告し、彼らの姓名を写して金瓶内で掣定しようと請求した。
 この文書を受け取って、光緒三十三年九月二十四日護理喀爾喀齊爾里克盟 (即ち
 賽因諾顔部) 長印務の副盟長が商卓徳巴の文書と印結証明をその商卓徳巴が派遣してき
 た宰桑達什敦多克という人に渡し、六十日間の期限内で北京まで送付して、書類等を理
 藩院指定のところに提出するようにと指示した⁽⁵⁵⁾。

盟長の上申書と一緒に、また当該商卓徳巴が提出した印結証明があった。

三音諾彦部 (即ち賽因諾顔部) の咱雅班第達呼圖克圖の商卓徳巴の車伯克多爾濟よ
 り印結を提出する事。当所の咱雅班第達呼圖克圖棍布札布がこの前光緒三十年二月
 間に入寂した時、そのことは既に報告して檔案にある。今、当所俗人索諾木多爾濟
 の息子津巴車林 (今年三歳)、俗人塔爾濟雅の息子巴扎爾 (今年三歳) を探し出し
 た。この二子は異常に聡明で、篤く黄教を信仰する。気の相は特に清らかで、前代
 呼圖克圖が昔使っていた金鈴等の物品を識別することができる。僕商卓特巴の
 車伯克多爾濟が詳しく調査した結果、これは確かのことである。是故に、印結を発
 行し上申する。光緒三十三年九月二十日。⁽⁵⁶⁾

ロシアのモンゴル学者ポズドネエフの旅行記の中では、咱雅活佛とその庫倫 (寺院)
 に対し、かなり詳しい記述がある。当時の喀爾喀三大活仏系統は、白い帳幕の汗＝
 哲布尊丹巴と、黄色い帳幕の汗＝札雅班第達 (即ち咱雅班第達) と、黒い帳幕の汗＝
 喇嘛葛根であった。1892 年 9 月、ポズドネエフが咱雅庫倫に到着した時、当時の
 咱雅班第達呼圖克圖は第五世であり、名前は羅布藏納木濟勒である。彼は三音諾顔部の
 甘珠爾公旗に生れて、当時二十七歳であった⁽⁵⁷⁾。

光緒三十四年二月十八日、理藩部が上奏して、理藩部堂官が護印札薩克喇嘛の
 烏爾吉巴雅爾と一緒に籤を雍和宮に祀られた金奔巴瓶内に封じ入れ、この札薩克喇嘛

(55) 「護理喀爾喀齊爾里克盟印務副盟長扎薩克多羅郡王庫魯固木扎布爲請掣定賽因諾顔部
 咱雅班第達呼圖克圖事致理藩院呈 (光緒三十三年九月二十四日)」、蒙古文、『雍和宮檔』
 第二十三冊、第 410 頁。

(56) 「喀爾喀賽因諾顔部咱雅班第達呼圖克圖商卓特巴車伯克多爾濟爲訪尋咱雅班第達呼圖克
 圖呼畢勒罕情形事甘結 (光緒三十四年九月二十日)」、漢蒙文、『雍和宮檔』第二十三冊、
 第 411—412 頁。

(57) [ロ] 波茲德涅耶夫著、劉漢明等訳『蒙古及蒙古人』第一卷、内蒙古人民出版社、1989
 年、第 440—443 頁。

ウルジー・バヤル等を三日間誦経させ、三日目に津巴車林を引き出した。よって咱雅班第達呼圖克圖棍布札布の呼畢勒罕とすることを申請⁽⁵⁸⁾し、皇帝の許可を得た。

賽因諾顔部から遣わしてきた使者が上申書を北京まで届いたことから、理藩院が咱雅班第達呼畢勒罕の掣定を主導したことまで、すべての手続きは、五か月も達していないうちに完成した。ただ、史料が足りないため、今回掣し出した呼畢勒罕は何代目の咱雅班第達呼圖克圖であるのかは、ここでは判断できない。

(八) 額爾德尼墨爾根班第達の呼畢勒罕の掣定

光緒三十四年、哲布尊丹巴呼圖克圖属の額爾德尼墨爾根班第達杜噶爾扎布の呼畢勒罕を認定した。この呼畢勒罕を認定する手続き上、前述した咱雅班第達呼畢勒罕の掣定と明らかに異なっているのは、哲布尊丹巴の額爾德尼商卓特巴と庫倫辦事大臣を通して、理藩院に上申して処理したことである。光緒三十四年三月、理藩院典属司が庫倫辦事大臣の請求を却下した檔案文書において、探し出した二子の印結証明が提出されなかったことに対し非難した。その本文は下記の通りである。

まもなく本部は、光緒三十三年十一月二十六日に、額爾德尼墨爾根班第達の呼畢勒罕の掣定を申し出る公文を受け取ったが、当旗より送るべき印結がなかった。調べ明かして結果を送る上に、この額爾德尼墨爾根班第達の前代の入瓶掣籤の既成案記録をも写し、姦通子〔の名前〕の入瓶掣籤の有無のことを調査して明らかにし、〔これらの結果を〕併せて部に届き、参考に資する〔と命じた〕。この等の事由を出した後、印結の紛失が判明されたため、補いて、改めて提出するように命じた。また、既成案記録を写し届けてくれた。届いた奏案を確認すれば、姦通子の記述はなかった。今回は、もとの諮詢のままで奏上すれば、殊に黄教を冒瀆することに当る。応じて庫倫辦事大臣に尋ね、調査し明らかにすれば手続きを取ることが可なり。⁽⁵⁹⁾

この公文は届いたはずである。そのおよそ半年後、靈童所在旗より印結書が発行されたからである。⁽⁶⁰⁾

このように、提出書類が完備になって、十二月に至った時、この呼圖克圖の呼畢勒罕が既に掣定された。檔案文書の記述は下記の通りである。

(58) 「理藩部奏爲掣定喀爾喀賽因諾顔部咱雅班第達呼圖克圖呼畢勒罕事摺稿（光緒三十四年二月十八日）」、漢滿文、『雍和宮檔』第二十三冊、第 413—417 頁。

(59) 「理藩院典属司爲咨駁庫倫辦事大臣掣定哲布尊丹巴呼圖克圖所屬額爾德尼墨爾根班第達呼畢勒罕事致堂呈（光緒三十四年三月十六日）」、漢文、『雍和宮檔』第二十三冊、第 422—423 頁。

(60) 「喀爾喀車臣汗部扎薩克輔國公通阿拉克等爲訪尋額爾德尼墨爾根班第達諾門汗呼畢勒罕情形事甘結」、漢蒙文、『雍和宮檔』第二十三冊、第 424—425 頁。

臣等がこの案の事情を調査して先例案に相応しいと確認し得たので、当該二子の名籤を写した。臣恩順は先般護印扎薩克喇嘛の烏爾吉巴雅爾と一緒に籤を雍和宮に祀っている金奔巴瓶内に封じ入れ、その扎薩克喇嘛烏爾吉巴雅爾等に命じて三日間誦經させた。臣達壽は三日目において、署印章嘉呼圖克圖と一緒に、温布扎布の息子奈當蘇倫を引き出した。これにより、彼を額爾德尼墨爾根班第達杜噶爾扎布の呼畢勒罕とすることを申請した。⁽⁶¹⁾

三、結び

以上を以て、金瓶掣籤制度の制定と雍和宮において金瓶設立の時期及び雍和宮檔案文書から窺える金瓶掣籤の一部事例を考察した。先行研究においてあまり触られなかったこの問題について、筆者の考察を通して、ここまでの研究成果の不足を補い、主に以下の数点の箇条にまとめる。

第一、金瓶掣籤制度制定の時期と目的。研究結果によれば、二つの金瓶を造ったことから、それぞれ拉薩の大昭寺と北京の雍和宮に設置したことまで、すべてが乾隆五十七年のうちに実現された。乾隆五十七年八月乾隆帝は福康安等への諭旨において、これらの諸段階を以下のように明確に語った。即ち、それ以降のモンゴル・チベット地域の大呼圖克圖が入寂した後、若干名の靈童を探し出して、最後に必ず拉薩の大昭寺の金瓶内で掣定する、と。そして、同年十月の『御製喇嘛説』には、モンゴル地域の呼圖克圖の呼畢勒罕は雍和宮の金瓶内で掣定することとさらに一步進んで明確にした。そして、乾隆五十八年の初め、雍和宮において、金瓶掣籤が実施され、モンゴル地域の呼畢勒罕の認定が始まった。金瓶掣籤制度は、乾隆五十八年下半期に至って、「事例」の形式で確立され定着し、歴史的慣例となった。

雍和宮金瓶掣定のような作法は、これ以前金瓶が設置されていなかった時と比べて、最も主要な変化の一つは、モンゴル地域の呼圖克圖の選定過程のなかで、ダライ・ラマ、パンチェン・エルデニと吹忠などのチベット方面の権力者の関与ができなくなったことである。また、金瓶掣籤制度が確立された時に、「各蒙古汗、王、貝勒、貝子、公、札薩克台吉の子孫を呼畢勒罕に指定することを全面的に禁止する」と定められた。筆者の所見では、雍和宮檔案文書中の数に限りのある事例から見れば、この規定は一定の範囲と時期内でほぼ実行することを得て、これでモンゴル地域の政教勢力の連合と権力の集中を一定程度で防いでいる。

第二、雍和宮金瓶内で掣定された呼圖克圖たちの身分問題。乾隆五十七年八月の諭旨によれば、モンゴル地域の呼圖克圖も大昭寺金瓶内で掣定されるべきであった。五十八年の初め、乾隆帝の命令によって、拉薩の大昭寺において科爾沁蒙古などの地域から送

⁽⁶¹⁾ 「理藩部奏爲掣定哲布尊丹巴呼圖克圖所屬額爾德尼墨爾根班第達呼畢勒罕事摺（光緒三十四年十二月二十日）」、漢滿文、『雍和宮檔』第二十三冊、第430—432頁。

られた呼圖克圖の呼畢勒罕の試行掣定を行ったことがあった。また、雍和宮で金瓶掣籤を行うこともこの時期から始まったのである。本文は、雍和宮檔案文書を通して例を挙げて考察した雍和宮で掣籤認定の呼圖克圖の呼畢勒罕のうち、西寧辦事大臣管轄区域内の者は6名（章嘉呼圖克圖の呼畢勒罕二代を含む）、内モンゴルは2名、外喀爾喀は2名であった。モンゴル地域の各呼圖克圖のなかに、哲布尊丹巴呼圖克圖は第三世以降のすべてがチベット地域から靈童を探し、その歴代呼畢勒罕の認定も共に拉薩で行われた。哲布尊丹巴呼圖克圖を除いての、モンゴル地域の各呼圖克圖の呼畢勒罕の掣定は、基本的に雍和宮金瓶内で掣定されたのである。西寧辦事大臣管轄区域内の諸呼圖克圖の呼畢勒罕の掣定は少し複雑である。規定によれば、その金瓶掣定は拉薩においても雍和宮においてもできるのである。雍和宮檔案文書に見える呼圖克圖6名は、すべて雍和宮金瓶内で掣定されたのである。そのうち、5名は駐京呼圖克圖で、あと1名は当地の呼圖克圖であった。では、駐京呼圖克圖の呼畢勒罕の認定は、すべて雍和宮金瓶掣籤を通らなければならないのであろうか。モンゴル地域の呼圖克圖に対し、掣籤を免れる状況があったのか否か。今現在見える事例は数に限りがあるが、肯定できるのは、個別の雍和宮での在職背景を持っているチベット活仏の呼畢勒罕のなかにも、雍和宮において掣定を行った者があったであろうことである。これらの疑問はまたさらに多い史料を発掘し、さらに深く掘って研究する必要がある。

第三、金瓶掣籤で新・呼畢勒罕を認定する手順の問題。雍和宮檔案文書の記述から見れば、金瓶掣籤制度が確立された後、呼畢勒罕の探訪、認定及び坐床の手順は、幾つかの主要な段階に分けられる。まずは、前代の呼圖克圖、大喇嘛などが入寂した後、その弟子または商卓徳巴が〔所属する〕盟と理藩院に報告し、天賦聡明・行儀端嚴な転生靈童を探しはじめる。ふつうは靈童二名を探し出して、前代の法器などの物品を識別させる。その後、盟長または辦事大臣が、旗内または当該呼圖克圖あるいは大喇嘛の商卓徳巴の説明によって、事情を理藩院に上申し、雍和宮における掣定を申請する。道光二年（1822）以後、また新しい規定があり、即ち旗内または商卓徳巴が探し出した靈童の保証書、つまり印結を提供し、盟長の上申書と一緒に理藩院に送る。次に、理藩院堂官と掌管京城喇嘛印務扎薩克達喇嘛と一緒に靈童の姓名を籤に写し、雍和宮金瓶内に入れる。当扎薩克達喇嘛等に命じて三日間誦経させ、三日目に、理藩院堂官によって籤一つを引き出し、呼畢勒罕の姓名を公表する。その後、理藩院典属司によって、掣定結果を皇帝に奏上し、皇帝の許可を得る。最後に、その呼圖克圖の弟子と商卓徳巴等が、理藩院と盟長まで伝えてきた皇帝の許可によって、新・呼畢勒罕に坐床させる。ダライ・ラマ、パンチェン・エルデニと哲布尊丹巴の転生以外、章嘉等の駐京呼圖克圖の転生者であり、みずから北京に参上しようと願った者は、すべて転生後、京に来て、皇帝に謁見した日から呼畢勒罕の名を取り除く。その他の遊牧地の呼圖克圖、諾們罕、班第達、堪布、綽爾濟

等は転生後、それぞれ年齢が十八歳になった時、当該管理大臣・盟長等が確かめた後、院に報告し、その名を取り除く。⁽⁶²⁾

拉薩における呼圖克圖の呼畢勒罕の金瓶掣籤の金瓶掣籤の手順と比べて、雍和宮の金瓶掣籤は場所が異なるほか、最大の相違は、拉薩での金瓶掣籤は駐蔵大臣が主導し、且つダライ・ラマなどの三大寺の喇嘛たちの関与の下で完成されたのであるが、雍和宮の金瓶掣籤は、理藩院堂官が主導し、掌管京城喇嘛印務扎薩克達喇嘛のような北京の喇嘛たちの関与の下で完成されたのである。このほか、細部にも一定の相違がある。例えば、拉薩の金瓶掣籤を行う前に一般的には七日間か九日間誦経するが、雍和宮の金瓶掣籤はただ三日間誦経する。また、道光二年以降、モンゴル地域の当該管理旗は印結を発行添付して偽りのないことを証明するなどである。

著 者 あとがき

本論文の修正にあたり、内容及び文章表現において、鄧鋭齡氏から大切なご意見をいただき、ここで感謝を申し上げる。

翻 訳 者 あとがき

本論文は、阿音娜氏^{アインナー}が2017年12月2日に龍谷大学にて開催された国際シンポジウム「チベットの宗教文化と梵文写本」において、漢名「孟秋麗」で発表した論文に基づき修正したものである。論文の翻訳校正につき、松川節氏・能仁正顕氏の多大なご協力、モンゴル語読みの方は村岡倫氏、チベット語読みの方は拉毛卓瑪氏^{ラモジヨマ}・更藏切主氏^{クンサンチジョン}、日本語ネイティブチェックは大澤絢子氏からご助言をいただいた。この場を借りて、ご教示くださった皆様に対し、感謝を申し上げる。

⁽⁶²⁾ 『欽定理藩院則例』巻56、「喇嘛事例一」、海南出版社、2000年。

中國語原稿

清代雍和宮的金瓶掣籤 ——以雍和宮檔案為中心

阿音娜

摘要

乾隆五十七年至五十八年，清廷在拉薩大昭寺和北京雍和宮各置一隻金瓶，規定以後蒙藏地區呼圖克圖的呼畢勒罕由金瓶掣籤認定，這就是清代金瓶掣籤制度的確立。相關研究，對西藏金瓶掣籤的實施情況有較具體深入的探討，而對雍和宮的金瓶掣籤情況至今還不甚清晰。現中國第一歷史檔案館保存的雍和宮滿、漢、蒙文檔案之公佈，為我們的深入研究提供了一些事例。從中可以瞭解到金瓶掣籤制度在雍和宮實施認定章嘉、噶勒丹席熱圖、敏珠爾、東科爾、隆布諾門汗以及烏珠穆沁莫羅木蘭占巴、土默特左翼旗察罕殿齊、賽因諾顏部咱雅班第達、哲布尊丹巴所屬額爾德尼默爾根班第達等西寧辦事大臣轄區及漠南、漠北等蒙古地區各呼圖克圖呼畢勒罕的過程。筆者在厘清以上事實的基礎上，將進一步探討蒙古地區各呼圖克圖呼畢勒罕認定的程序和特點。

關鍵詞：清代、金瓶掣籤、雍和宮、雍和宮檔案

引言

乾隆末年，廓爾喀（Tib. gorkha）之役即將結束之際，清廷在拉薩的大昭寺（Tib. gtsug lag khang）和北京的雍和宮各置一隻金瓶，規定以後蒙藏地區呼圖克圖（Mon. quduγtu，亦作“胡圖克圖”）之呼畢勒罕（Mon. qobilγan，亦作“呼必勒罕”“呼弼勒罕”）由金瓶掣籤（Tib. gser bum skrug pa）認定。有關研究，對大昭寺以及布達拉宮（Tib. rtse po ta la）金瓶掣籤的實施情況有較具體深入的探討⁽¹⁾，而金瓶掣籤在雍和宮的實施情況囿於史料的缺失，至今還不甚清晰。前人研究中僅一筆帶過，沒有交待其具體的歷史過程⁽²⁾。現中國

⁽¹⁾ 主要成果有：柳陞祺、鄧銳齡：《清代在西藏實行金瓶掣籤的經過》，《民族研究》1982年第4期。廖祖桂、陳慶英、周煒：《論清朝金瓶掣籤制度》，《中國社會科學》1995年第5期。恰白·次旦平措等著，陳慶英等漢譯：《西藏通史——松石寶串》，西藏古籍出版社，1996年第1版，2008年第3版。陳慶英：《清代金瓶掣籤制度的制定及其在西藏的實施》，《西藏民族學院學報》2006年第3、4、5期。

⁽²⁾ 金鋒整理注釋：《küke qota-yin süm-e keyid》（蒙古文），內蒙古人民出版社，1982年。103頁、155頁、191頁、201頁、220—221頁、225頁。

第一歷史檔案館保存的雍和宮滿、漢、蒙文檔案的公佈⁽³⁾，為我們深入研究這一問題提供了一些事例。本文通過考察漠南、漠北蒙古和西寧辦事大臣管轄區域內幾位呼圖克圖之呼畢勒罕的掣定過程⁽⁴⁾，討論金瓶掣籤制度在雍和宮實施的具體情況。

一、雍和宮金瓶掣籤制度的形成

蒙古地區的活佛轉世制度是在藏區相關慣例的基礎上延伸和發展起來的。而清代蒙古地區的活佛轉世則是從漠南、漠北蒙古的一些高僧那裡開始的。例如，額魯特部出身的一世內齊托音在 17 世紀初來到漠南蒙古地區傳教，康熙初年圓寂。二世內齊托音的轉世過程在其傳記裡記載到：

他是承天啟運聖武成吉思汗之弟君主哈薩爾的後裔，出身于明安兀魯思諾顏之門，其父幹齊爾台吉，其母阿迪思。他誕生于辛亥年（1671，清康熙十年）仲秋月初一日拂曉。他剛一出世，即聲稱：“我要盤腿坐！”又說：“坐上首！”其母初懷孕時，夢見眾僧敲鐃打鼓，誦經沐浴。……他三歲時，對其祖父說道：“你是大內齊，我是小內齊，應當帶頭念經。”便讀起《無險歸依經》《發心經》與《不可思議經》⁽⁵⁾。

前世內齊托音的弟子土默特的察罕畢力克圖禪師赴西藏向班禪額爾德尼及護法神（Tib. chos skyong，漢字音譯“吹忠”。亦作“護法”）等奏報此事，班禪額爾德尼等允許其轉世並明示轉世靈童的父母名及方位。於是，內齊托音的徒弟們按照班禪等的指示，尋到靈童，靈童認出了前世的釋迦牟尼像等物品。隨後，奏報皇帝，皇帝降旨：“如果你們這些徒弟們和檀越（即施主）們確信無疑，那就迎入本寺吧！”⁽⁶⁾

另外，清代漠北喀爾喀地區最大的活佛是哲布尊丹巴（Tib. rje btsun dam pa）呼圖克圖。一世哲布尊丹巴在清朝與蒙古準噶爾部的戰爭之際率眾喀爾喀歸附清朝有功，他在康熙時期多次去漠南的多倫諾爾和北京，雍正初年圓寂。我們從《哲布尊丹巴傳》裡也可以瞭解到其轉世和被認定的過程：

額駙達爾罕親王夢中見其念珠的大珠及拇指上節化為金剛菩薩，其妻查幹達拉夢

(3) 中國第一歷史檔案館、雍和宮管理處合編：《清代雍和宮檔案史料》（1—24 冊），中國民族攝影藝術出版社 2004 年。以下簡稱《雍和宮檔》。

(4) 據《雍和宮檔》顯示，作為拉薩“四大林”活佛之一的一世策墨林阿旺楚臣的轉世也是在雍和宮金瓶掣定的。（“駐藏辦事大臣和寧奏報達賴喇嘛等為掣定薩瑪第巴克什呼畢勒罕謝恩事摺（嘉慶五年九月八日）”滿文，《雍和宮檔》第十六冊，第 243—242 頁。）《八世達賴喇嘛傳》248 頁也印證了這一事件。（中國藏學出版社，2006 年）

(5) 達磨三諾陀羅著、烏力吉圖譯：《內齊托音二世傳》，《清代蒙古高僧傳譯輯》，全國圖書館文獻縮微複製中心，1990 年，第 169—170 頁。

(6) 達磨三諾陀羅著、烏力吉圖譯：《內齊托音二世傳》，《清代蒙古高僧傳譯輯》，全國圖書館文獻縮微複製中心，1990 年，第 173—174 頁。

中見溫都爾格根（即一世哲布尊丹巴呼圖克圖）步入其庭院，後入室內。兩人夢中屢見帳內現黃光，山崗上百花盛開，處處好徵兆。二世哲布尊丹巴降生之前，其母頭頂現出白光，映得渾身發亮。木龍年即雍正二年仲春月初一黎明時刻，哲布尊丹巴二世誕生。頓時五彩繽紛，種種吉端顯現，眾人見此異常驚奇，齊聲祈福。把四個幼童的名字記下來奔赴西藏，奏報眾博格達及法主，以確定誰為真正的轉世靈童。眾博格達及法主降旨：“達爾罕親王額駙之子世族高貴。”喀爾喀使者赴藏之際，雍正皇帝夢中見哲布尊丹巴呼圖克圖一世求見，告之曰：“我已轉世，那第四位幼童，額駙妾之子即是。”爾後，雍正皇帝頒旨：“朕夢中見到老呼圖克圖，告朕其投胎為額駙之長子，那幼童當為呼圖克圖。與西方眾博格達及法主所說的四額駙（即達爾罕親王）之子世族高貴相符，理當由其坐床。⁽⁷⁾

以上二位高僧的轉世資料，顯示了漠南、漠北蒙古地區活佛轉世的一些基本事實。此外，我們從零星的記載中還可以瞭解到金瓶掣籤制度確立之前甘青地區一些藏傳佛教高僧的轉世情況。例如嘉木樣（Tib. 'jam dbyangs）活佛是拉卜楞寺（Tib. bla brang bkra shis 'khyil）寺主，一世嘉木樣圓寂後，他的轉世二世嘉木樣活佛的認定過程在史書裡有簡略的記述：

于第十二饒迥的土猴年（1728 雍正六年）伴隨諸種祥瑞降生，起名為仁欽喀。……他十三歲時在伯父東科爾曼珠室利活佛身前受沙彌戒，起法名為阿旺絳央赤列堅贊貝桑布，學習兩部學識，從東科爾活佛聽受獨雄大威德金剛灌頂並完整地體驗，並聽受文殊言教的講解及作明母隨許法等許多教法。他十六歲時，由拉摩護法、乃窮護法、噶哇冬護法等認定為嘉木樣協貝多吉活佛的轉世，並被迎請到拉卜楞寺坐床。⁽⁸⁾

除此之外，在另外一些藏文、滿文史料中還記載了雍正初年二世章嘉（Tib. lchang skya）呼圖克圖⁽⁹⁾和乾隆五十年代果莽寺（Tib. sgo mang）敏珠爾（Tib. smin grol）呼圖克圖⁽¹⁰⁾的呼畢勒罕的認定過程。再結合歷世達賴喇嘛、班禪額爾德尼之呼畢勒罕認定過程的記載，我們可以把金瓶掣籤制度確立之前呼畢勒罕的認定過程基本概括為以下幾個環節：首先，母親懷孕和出生時，或托夢新呼畢勒罕之父母，或發出黃色、白色的光芒，呈現諸多

⁽⁷⁾ 申曉亭、成崇德譯注：《哲布尊丹巴傳》，《清代蒙古高僧傳譯輯》，第 236 頁。

⁽⁸⁾ 固始噶居巴·洛桑澤培著，陳慶英、烏力吉譯注：《蒙古佛教史》，天津古籍出版社，1991 年，第 103 頁。

⁽⁹⁾ 土觀洛桑卻貝尼瑪著，陳慶英、馬連龍譯：《章嘉國師若必多吉傳》，中國藏學出版社，2007 年。

⁽¹⁰⁾ “駐西寧辦事大臣奎舒奏報認定敏珠爾呼圖克圖呼畢勒罕情形事摺（乾隆五十五年十月初四日）”，滿文，《雍和宮檔》第十四冊，第 197—195 頁。（按：滿文檔案排版是由後頁往前頁排）

瑞兆。其次，新呼畢勒罕出生以後，聰慧超人，很快就能誦經或認出前世活佛的物品等。第三，得到達賴喇嘛、班禪額爾德尼或護法神、皇帝的認可，請至本寺坐床。

下面考察金瓶掣籤制度的制定過程。乾隆五十七年七月，由清內務府造辦處開始製作金奔巴瓶（Tib. gser bum），九月初完成一隻。接著照原樣另制一隻，於十月二十六日供雍和宮。⁽¹¹⁾金奔巴瓶是乾隆帝親自監督製作的⁽¹²⁾。五十七年九月初，乾隆帝派侍衛二人把金奔巴瓶送去拉薩，二人在十一月二十日到達，金奔巴瓶被隆重地迎供在大昭寺內⁽¹³⁾。

乾隆五十七年八月二十三日的詔書中就提到，“令拉穆吹忠（Tib. la mo chos skyong，即拉穆（拉摩）護法）四人作法降神指出呼畢勒罕，貯於由京發去之金奔巴瓶內，令達賴喇嘛等會同駐藏大臣，共同拈定具奏，作為呼畢勒罕。”⁽¹⁴⁾查雍和宮檔，乾隆五十七年八月有諭旨：“此後，如各蒙古地方所恭敬之呼圖克圖等圓寂後，指認呼畢勒罕時，亦如藏地四名吹忠（護法）隆丹（Tib. lung bstan 預言），指認幾名靈童，將他們的姓名和所生年月繕寫入金瓶內，達賴喇嘛及駐藏大臣等監視拈出掣定。不得如往常所恭敬呼圖克圖之呼畢勒罕出生於部落札薩克（Mon. jasad，亦作“扎薩克”）王公的子孫之內。”⁽¹⁵⁾看來，最初乾隆帝曾設想在拉薩的金瓶內掣定蒙古地區呼圖克圖之呼畢勒罕。

乾隆五十七年十月，在雍和宮供奉金瓶的同時，乾隆帝也頒佈了《禦制喇嘛說》（以下簡稱為《喇嘛說》）。在《喇嘛說》中，乾隆帝闡述了清朝藏傳佛教政策，以及期間出現的問題和要推行的對策。在此，乾隆帝改變以往的說法，準備在雍和宮的金瓶內掣定蒙古內外扎薩克之大呼畢勒罕。乾隆看來“興黃教，即所以安眾蒙古，所系非小，故不可不保護之。”但是，“所生之呼必勒罕率出一族，斯則與世襲爵祿何異，”“即蒙古內外各札薩克供奉之大呼必勒罕，近亦有各就王公家子弟內轉世化生者，”“又，各蒙古之大呼必勒罕，亦令理藩院行文，如新定藏中之例，將所報呼必勒罕之名，貯于雍和宮佛前安供之金奔巴瓶內，理藩院堂官會同掌印之札薩克達喇嘛等公同籤掣，或得真傳，以息紛競。”⁽¹⁶⁾當時在雍和宮立碑刻石撰寫《喇嘛說》的一個主要的目的，無非就是要公佈金瓶掣籤認定呼畢勒罕之制度。

廓爾喀之役即將結束之際，乾隆帝鑒於藏內外出現的問題，通過較長時間與在前藏

⁽¹¹⁾ 還有信息顯示在青海塔爾寺設有金瓶（見《元以來西藏地方與中央政府關係檔案史料彙編》5（中國藏學出版社，1994年）第2203—2204頁），需要進一步核實。

⁽¹²⁾ “乾隆五十七年各作成做活計檔”，中國第一歷史檔案館、香港中文大學文物館合編：《清宮內務府造辦處檔案總匯》53冊，人民出版社，2005年，第96—97頁。王家鵬：《清宮藏有關“金瓶掣籤文物析”》，《文物》1995年3期。

⁽¹³⁾ 《衛藏通志》卷五“喇嘛”，《西藏志 衛藏通志》合刊，西藏人民出版社，1982年。

⁽¹⁴⁾ 鄧銳齡：《清乾隆五十八年（1793）藏內善後章程的形成經過》，《中國藏學》2010年第1期。

⁽¹⁵⁾ “上諭為著設立金奔巴瓶掣定大呼圖克圖呼畢勒罕事（乾隆五十七年八月二十九日）”，滿文，《雍和宮檔》第十四冊，第355—352頁。

⁽¹⁶⁾ 《北京圖書館藏中國歷代石刻拓本彙編》第76冊，第37—40頁，中州古籍出版社，1989年。

的福康安、和琳等大臣討論，制定出諸多的西藏善後章程。金瓶掣籤制度也是作為其一公佈出來的。乾隆五十七年十一月丙午：“又諭，藏內善後諸事，經福康安等公同酌定後，俱已立法可行。……又前發去金奔巴瓶，原為籤掣呼畢勒罕之用，但不必俟該處大呼圖克圖轉世方行試用。或現在藏內，不拘何呼圖克圖應出呼畢勒罕，即可將金奔巴瓶先行籤掣。如此辦理數次，定為章程後，該處僧俗人等共相遵奉，將來遇有大呼圖克圖轉世，照此籤掣，更可堅眾人崇信之心。而從前私相傳襲積弊，亦可不動聲色，藉以革除。”⁽¹⁷⁾

以上諭旨就是首先要試行掣籤的法令依據。到乾隆五十八年二月，福康安等找到了首批要試行掣籤的幾個靈童人選，他們的名字是從西寧和內扎薩克哲里木盟科爾沁地方送來前藏拉薩的，並於二月十一日在大昭寺進行了掣籤。福康安等人奏摺詳細奏報了此次金瓶掣籤過程，該條奏摺的末尾還針對此次試掣選定蒙古和西寧地方的呼畢勒罕掣籤做了一說明：

再查前奉諭旨，各蒙古地方所出之呼畢勒罕俱于雍和宮設立之金本巴瓶內抽掣。今此數呼畢勒罕既已送到藏內，臣等遵即試掣。嗣後西寧地方距藏較近，將所出之呼畢勒罕仍就近送藏入瓶抽掣。此外各蒙古地方所出之呼畢勒罕俱應由理藩院行文令其將名字送京，在雍和宮金本巴瓶內掣籤，以別真偽。⁽¹⁸⁾

理藩院的議復檔案沒有流傳下來。但是，從後來不久舉行的首次雍和宮金瓶掣籤的事例看，當時在理藩院堂官及京城掌印扎薩克達喇嘛（Man. doron jafaha jasak da lama）等人的參與下，認定漠南、漠北蒙古地區呼畢勒罕的程序基本確定下來了。正在此時，喀爾喀發生賽音諾顏部額爾德尼班第達（Mon. erdeni bandida）呼圖克圖之呼畢勒罕轉世舞弊事件，土謝圖汗車登多爾濟被革汗爵，額爾德尼班第達呼圖克圖之商卓特巴那旺達什被流放河南。乾隆五十八年三月戊申諭曰：

眾蒙古地方舊有各旗部落供奉之呼圖克圖甚多，此內大小不等，如概令赴藏，交達賴喇嘛會同駐藏大臣掣籤，不免煩擾，且路途遙遠。軫念眾蒙古力量維艱，因於京城雍和宮內亦設一金奔巴瓶，如蒙古地方出呼畢勒罕，即報明理藩院，將年月、名姓繕寫籤上，入於瓶內，交掌印扎薩克達喇嘛⁽¹⁹⁾呼圖克圖等，在佛前念經，並交理藩院堂官公同掣籤。其從前王公子弟內私自作為呼畢勒罕之陋習永行停止。⁽²⁰⁾

⁽¹⁷⁾ 《清實錄》卷 1416，乾隆五十七年十一月丙午。《乾隆朝上諭檔》17，廣西師範大學出版社，2008 年，第 305 頁。

⁽¹⁸⁾ “福康安奏報西寧及科爾沁等地送到各呼畢勒罕遵旨入瓶試掣事摺（乾隆五十八年二月十三日）”，漢文，《雍和宮檔》第十五冊，第 28—29 頁。《衛藏通志》卷五“喇嘛”。

⁽¹⁹⁾ 此處史料有誤，應為“掌印扎薩克達喇嘛”。

⁽²⁰⁾ 《清實錄》卷 1424，乾隆五十八年三月戊申。“密寄駐藏辦事尚書和琳著嗣後掣籤認定各呼畢勒罕（乾隆五十八年二月初八日）”，滿文，《雍和宮檔》第十五冊，第 27—21 頁。“上諭

此諭旨強調了兩點：一是，日後蒙古地方呼畢勒罕認定不能前去前藏，只能在雍和宮金瓶內掣定；二是，禁止在王公子弟內私自選定呼畢勒罕的陋習。由此可見，雍和宮金瓶掣籤制度並不是一次性制定、公佈和實施的，而是在乾隆五十七年十月公佈基本的條例後又陸續有所補充和修訂，直到五十八年下半年時基本確定下來的。

在額爾德尼班第達呼圖克圖之呼畢勒罕選認時，取消土謝圖汗之子的靈童資格後，經過幾次篩選，最後選出五名靈童。乾隆五十八年三月二十四日，皇帝下令在雍和宮金瓶內掣定，這就是雍和宮實施的第一個金瓶掣籤的事例。⁽²¹⁾乾隆五十八年四月初一日上諭：“為指認額爾德尼班第達呼圖克圖之呼畢勒罕事，著奎舒等將其訪得之五名兒童姓名繕寫於籤上，放入雍和宮所供金本巴瓶內，眾呼圖克圖喇嘛等諷經三日。四月初一日，在佛像前掣出喀爾喀俗人莎畢伊特格勒之子齊旺扎布，眾呼圖克圖等誠信祈禱，諷經三日，於本月初一日晴朗天掣出齊旺扎布之名。是為祥瑞，朕甚欣慰，即著齊旺扎布為額爾德尼班第達呼圖克圖之呼畢勒罕。”⁽²²⁾

到乾隆五十八年八月時，皇帝又有諭旨：此後各蒙古地方指認呼畢勒罕時，停止由拉穆吹忠降神降丹，在雍和宮設之金奔巴瓶內掣籤指認⁽²³⁾。從此禁止拉穆吹忠等護法神參與蒙古地區指認呼畢勒罕的過程。至此，形成了《清會典事例》中的一項定制——“指認呼畢勒罕定制”⁽²⁴⁾。

乾隆五十八年，金瓶掣籤制度以“事例”的形式固定下來，成為清朝的一項歷史定制，這就是乾隆末年金瓶掣籤制度逐步確立的過程。在其後相當長的一段時間內，這一制度沒有太大變化。只是到了道光年間，有關蒙古地區的相關法令又補充一條：“道光二年議准，認獲呼畢勒罕時，該旗加具印結報院，方准入瓶掣籤。”⁽²⁵⁾

二、在雍和宮金瓶掣籤的幾個事例

乾隆五十九年，帕巴拉（Tib. 'phags pa lha）呼圖克圖之呼畢勒罕在大昭寺金瓶內掣定。⁽²⁶⁾這是西藏大呼圖克圖之呼畢勒罕第一次實施金瓶掣籤的事例。其後，除了個別得到

為蒙古番子地區呼圖克圖呼畢勒罕于雍和宮金奔巴瓶掣定等情事（乾隆五十八年三月十五日）”，《雍和宮檔》，滿蒙文，第十五冊，第 126—94 頁。

(21) “上諭為額爾德尼班第達呼圖克圖呼畢勒罕著以雍和宮金本巴瓶掣定事（乾隆五十八年三月二十四日）”，滿文，《雍和宮檔》第十五冊，第 158—157 頁。

(22) “上諭為掣定額爾德尼班第達呼圖克圖呼畢勒罕情形著遍傳內外札薩克蒙古番子等事（乾隆五十八年四月初一日）”，滿文，《雍和宮檔》第十五冊，第 194—192 頁。

(23) “寄諭駐藏大臣和琳著將藏地有無出小呼畢勒罕事乘便奏聞（乾隆五十八年五月三十日）”，滿文，《雍和宮檔》第十五冊，第 304 頁。“寄諭駐藏大臣和琳等嗣後凡求吹忠指認呼畢勒罕者重懲不貸（乾隆五十八年八月十四日）”，滿文，《雍和宮檔》第十五冊，第 351 頁。

(24) 《清會典事例》卷 975；相同內容的上諭見“上諭為蒙古番子地區呼圖克圖呼畢勒罕于雍和宮金奔巴瓶掣定等情事（乾隆五十八年三月十五日）”，《雍和宮檔》，滿蒙文，第十五冊，第 126—94 頁。

(25) 《清會典事例》卷 975。

(26) “寄諭駐藏大臣松筠著以奔巴瓶掣定帕克巴拉呼圖克圖之呼畢勒罕（乾隆五十九年九月十六

皇帝允准免籤者之外，西藏的歷輩達賴喇嘛、班禪額爾德尼和攝政（Tib. rgyal tshab）活佛以及各個教派的主要呼圖克圖之呼畢勒罕也都在拉薩實行金瓶掣籤認定。⁽²⁷⁾那麼，通過雍和宮內的金瓶掣定出哪些呼圖克圖之呼畢勒罕呢？他們的認定過程又是怎樣的？以下我們以雍和宮檔案中的一些記載為例，⁽²⁸⁾並結合其他相關史料，考察在北京雍和宮內實施金瓶掣籤的具體情況。

（一）四世隆布諾門汗和七世東科爾呼圖克圖之呼畢勒罕的掣定

乾隆五十八年二月上諭：“嗣後如西寧所屬地方呼圖克圖圓寂尋覓呼畢勒罕時，不可斷然仍舊隨意辦理，務必選出三、四個靈童，或致駐藏大臣在召地（即西藏）之奔巴瓶內掣定，或報理藩院，在雍和宮之奔巴內掣定。視其便利，以距離近、方便和節省而行。”⁽²⁹⁾由此觀之，至嘉慶初年，西寧辦事大臣所管轄區域內的呼圖克圖之呼畢勒罕認定，按法令來講，在拉薩或雍和宮都可以金瓶掣籤認定。

嘉慶七年十一月，據西寧辦事大臣所報，前世隆布諾門汗（Tib. rong po no monhan）於乾隆五十九年圓寂。其後，尋得兩名靈童，上報理藩院準備在雍和宮的金奔巴瓶內掣定。隆布諾門汗，又譯“隴布諾捫汗”或“隆務諾捫罕”，他的轉世可以追溯到位於青海同仁縣隆務寺（Tib. rong bo'i dgon chen）的創建者桑丹仁慶。桑丹仁慶是元代的高僧，康熙時，他的轉世傳到夏日阿旺程列嘉措。1697年，夏日阿旺程列嘉措赴藏入哲蚌寺（Tib. 'bras spungs dgon pa）學經，從達賴喇嘛那裡獲得諾捫罕名號。1734年，他又在隆務寺創建密宗學院，其轉世呼畢勒罕是根登程列拉傑，於乾隆五十九年圓寂。根登程列拉傑的呼畢勒罕洛桑曲扎嘉措，出生在木兔年（1795），父親是前一世章嘉國師的侄子尕藏土丹南傑。⁽³⁰⁾從嘉慶八年十一月的謝恩摺來看，根登程列拉傑的呼畢勒罕洛桑曲扎嘉措確實是在雍和宮金瓶內掣定的。⁽³¹⁾

另外，又前世東科爾呼圖克圖于嘉慶三年圓寂，尋得兩名靈童。在此提到的東科爾呼圖克圖是清代駐京呼圖克圖之一。據研究，六世東科爾呼圖克圖名嘉木樣丹津嘉措（1754

日）”，滿文，《雍和宮檔》第十六冊，第43—41頁；“寄諭四川總督和琳等著將指定帕克巴拉呼圖克圖呼畢勒罕各情速奏（乾隆五十九年十月初四日）”，滿文，《雍和宮檔》第十六冊，第45—44頁。

⁽²⁷⁾ 個別西藏的高僧因特殊原因有在雍和宮金瓶掣定的例子。見莊吉發：《天高皇帝遠——清朝西陲的邊臣疆吏》，載《邊臣與疆吏》，中華書局，2007年。

⁽²⁸⁾ 據《雍和宮檔》序（一）言，先後共十四次在雍和宮經金瓶掣籤確認了大呼圖克圖的轉世靈童。

⁽²⁹⁾ “駐西寧辦事大臣台布奏為請以雍和宮所奉金奔巴瓶掣定隆布諾門汗及東科爾呼圖克圖呼畢勒罕等情事摺（嘉慶七年十一月十二日）”，滿文，《雍和宮檔》第十六冊，第307—304頁。

⁽³⁰⁾ 智觀巴·貢卻乎丹巴繞吉著，吳均、毛繼祖、馬世林譯：《安多政教史》上，甘肅民族出版社，1989年，第292—299頁。

⁽³¹⁾ “駐西寧辦事大臣都爾嘉奏報囊素喇嘛根敦沙喇布以掣定隆布諾門汗呼畢勒罕代為謝恩事摺（嘉慶八年十一月二十六日）”滿文，《雍和宮檔》第十六冊，第346—345頁。

—1798)，誕生於隆務辛勒卡，庚辰年（1760）在塔爾寺（Tib. sku 'bum byams bagling）出家，師從卻藏土登旺曲，在拉卜楞寺顯宗學院學經。乾隆四十年他赴北京向皇帝請安，受到優待。後赴拉薩色拉寺攻讀五部大論。丙辰年（1784），任色拉寺麥巴扎倉堪布。丙午年（1786）歸故里。第二年又赴內地，四十五歲戊午年（嘉慶三年）圓寂。七世名噶桑嘉木樣嘉措（1799—1811），屬阿日（a-rig）首領系統，據以上檔案可以推測是在雍和宮金瓶掣定的。他於辛未年（1811）赴前藏，入色拉寺麥巴扎倉學經，同年十一月逝去⁽³²⁾。而第八世之呼畢勒罕是在西藏大昭寺所供之金瓶內掣定的⁽³³⁾。

（二）五世噶勒丹席熱圖呼圖克圖之呼畢勒罕的掣定

道光四年十一月，因在雍和宮金瓶掣定西寧密那克地方的番子（滿文 Fanzi 之漢字音譯）吹津之子喇什為噶勒丹席熱圖（Mon. galdan siregetü）呼圖克圖之呼畢勒罕，由西寧辦事大臣處代奏噶勒丹席熱圖商卓特巴扎薩克喇嘛為其師傅被認定和坐床事之謝恩摺。⁽³⁴⁾在此認定的應該是第五世噶勒丹席熱圖呼圖克圖阿旺土登丹白尼瑪，生於塔爾寺屬的彌藥族，是當時察罕諾們汗的親兄弟，道光初年曾赴北京，後在塔爾寺習經。道光九年，奉旨准在紫禁城騎馬。道光十八年，奉旨賞給食札薩克達喇嘛俸銀。同年十二月，奉旨補授副札薩克達喇嘛。卒於道光二十六年。⁽³⁵⁾

（三）五世、六世章嘉呼圖克圖之呼畢勒罕的掣定

第四世（一說第十六世）章嘉呼圖克圖⁽³⁶⁾圓寂後，於道光二十六年七月理藩院上奏請旨，依據歷世章嘉呼圖克圖等高僧圓寂後責成有學問的喇嘛編寫新的禱告經文，並誦經祈禱呼圖克圖之呼畢勒罕早日轉世。⁽³⁷⁾

道光三十年宣宗（道光帝）有旨：章嘉呼圖克圖自道光二十六年入寂後，至今已屆三載，何以尚未轉世，切勿再行延誤，著速尋覓來告，以慰朕望⁽³⁸⁾。並派四世章嘉呼圖克圖之大弟子森沙巴等人速往西寧尋覓。“是年三月，他們至西寧，來稟西寧欽差大臣喀拉

⁽³²⁾ 若松寬：《青海湟源縣的東科爾寺及東科爾呼圖克圖》，載《清代蒙古的歷史與宗教》，黑龍江教育出版社，哈爾濱，1994年。

⁽³³⁾ 《清實錄》卷38，道光二年七月癸酉；《清實錄》卷53，道光三年六月己亥。

⁽³⁴⁾ “駐西寧辦事大臣穆蘭岱奏報商卓特巴扎薩克喇嘛以掣定噶勒丹席熱圖呼圖克圖呼畢勒罕請代為謝恩事摺（道光四年十一月二十九日）”，滿文，《雍和宮檔》第十七冊，第388—387頁。

⁽³⁵⁾ 若松寬：《噶勒丹錫呼圖呼圖克圖考——清代駐京呼圖克圖研究》，載《清代蒙古的歷史與宗教》，黑龍江教育出版社，哈爾濱，1994年。妙舟法師：《蒙藏佛教史》第五篇第三章第一節“噶爾丹錫呼圖呼圖克圖”，江蘇廣陵古籍刻印社，1993年。

⁽³⁶⁾ 妙舟法師：《蒙藏佛教史》述章嘉系統往前追認13世。

⁽³⁷⁾ “理藩院奏為誦經祈禱章嘉呼圖克圖呼畢勒罕早日轉世事摺（道光二十六年七月二十八日）”，滿文，《雍和宮檔》第十八冊，第221—220頁。

⁽³⁸⁾ 妙舟法師：《蒙藏佛教史》第五篇第二章第五節。

沁曰，奉諭旨與第十六世章嘉呼圖克圖之弟超伯森呼圖克圖同去尋覓。並攜前世章嘉呼圖克圖日常所需之鈴杵、念珠暨他法器，令其認領。旋乃尋獲幼孩三名，靈異均著。西寧欽差大臣依例上奏清廷，文宗（咸豐帝）⁽³⁹⁾諭旨，於十二月十五日在雍和宮法輪殿誦經禮佛三天，同禮（理）藩院大臣滿入金本巴瓶中抽籤，得道光二十九年己酉瑞耶巴噶地方唐古忒（即西藏，亦作“唐古特”等）族童朗波之子，庶名森哈薩托者，為真正第十七世章嘉呼圖克圖之呼畢勒罕。十二月十七日理藩院上奏，文宗旨諭准如所請，於十二月二十九日，著將森哈薩托定為第十七世章嘉呼圖克圖之真正呼畢勒罕。復將轉世事由，行文曉諭內外蒙古各旗，敕賜呼畢勒罕人骨念珠。”⁽⁴⁰⁾

五世章嘉呼圖克圖于光緒元年在北京圓寂。尋訪六世章嘉呼圖克圖之呼畢勒罕費時較長。據光緒七年十一月上諭，皇帝接到西寧辦事大臣的奏摺，交給理藩院來具體辦理尋得三名靈童的掣籤事宜⁽⁴¹⁾。據檔案顯示，到光緒八年七月才最後掣定新呼畢勒罕。“又查，章嘉呼圖克圖、阿嘉呼圖克圖、拉果呼圖克圖、南喀呼圖克圖、敏珠爾呼圖克圖等歷世駐京，他們所出呼畢勒罕由本院入于雍和宮所供金瓶內掣定，等情在案”⁽⁴²⁾，將訪得三名靈童之姓名繕寫放入雍和宮所供金瓶後，掌印扎薩克達喇嘛等誦經三天后，於光緒八年七月十四日大臣阿慶噶等與京城扎薩克達喇嘛公同掣定羅藏丹森為新呼畢勒罕。⁽⁴³⁾將掣定結果報朝廷認可後，於光緒九年正月西寧辦事大臣轉奏章嘉呼圖克圖呼畢勒罕之謝恩摺。⁽⁴⁴⁾

（四）二十一世敏珠爾呼圖克圖之呼畢勒罕的掣定

宣統元年十一月，駐西寧辦事大臣慶恕奏報“在於雍和宮金瓶內掣出麥勒扎薩克台吉齊莫特林增旗蒙古安加爾之子多吉加作為敏珠爾呼圖克圖之呼弼勒罕”，本年十月初一日迎請到本寺坐床⁽⁴⁵⁾。摺中只言迎入本寺時間，未及具體掣籤時間。

敏珠爾呼圖克圖也是清代駐京呼圖克圖之一，據妙舟法師《蒙藏佛教史》，第二十一世敏珠爾呼圖克圖，法號多吉加，光緒三十一年轉世于青海勒地方札薩克台吉齊莫特林增旗內，父名安加爾。入掣于雍和宮之金本巴瓶，宣統元年十月初一在雍和宮籤掣，迎至西

⁽³⁹⁾ 道光三十年正月道光帝卒，咸豐繼位，廟號文宗。

⁽⁴⁰⁾ 妙舟法師：《蒙藏佛教史》第五篇第二章第五節。

⁽⁴¹⁾ “上諭為著將訪獲章嘉呼圖克圖轉世靈童交理藩院照例辦理事（光緒七年十一月十四日）”，滿文，《雍和宮檔》第十九冊，第 117 頁。

⁽⁴²⁾ “理藩院奏為掣定章嘉呼圖克圖呼畢勒罕等情事摺（光緒八年七月二十日）”，滿文，《雍和宮檔》第十九冊，第 128—125 頁。

⁽⁴³⁾ “理藩院奏為掣定章嘉呼圖克圖呼畢勒罕等情事摺（光緒八年七月二十日）”，滿文，《雍和宮檔》第十九冊，第 128—125 頁。妙舟法師：《蒙藏佛教史》第五篇第二章第六節。

⁽⁴⁴⁾ “駐西寧辦事大臣李慎為轉奏章嘉呼圖克圖呼畢勒罕謝恩事摺（光緒九年正月二十四日）”，滿文，《雍和宮檔》第十九冊，第 145—140 頁。

⁽⁴⁵⁾ “駐西寧辦事大臣慶恕奏報徒眾為雍和宮金瓶掣出敏珠爾呼圖克圖之呼畢勒罕謝恩事（宣統元年十一月初七日）”，漢文，《雍和宮檔》第二十冊，第 55 頁。

寧本寺坐床⁽⁴⁶⁾。

（五）烏珠穆沁親王旗莫羅木蘭占巴綽汗額爾德尼之呼畢勒罕的掣定

光緒二十七年，雍和宮掣定內扎薩克錫林郭勒盟烏珠穆沁親王旗莫羅木蘭占巴（Mon. molom laranba）綽汗額爾德尼呼畢勒罕。對此事，流傳下來的檔案記錄很詳實。據雍和宮檔案，光緒二十七年七月二十五日，由錫林郭勒盟長處呈文理藩院陳述烏珠穆沁親王旗莫羅木蘭占巴綽汗額爾德尼呼畢勒罕事情：

據本盟烏珠穆沁親王旗署印協理台吉卓凌旺濟勒報稱，本旗大乘轉輪寺施呼根喇嘛入于呼圖克圖之內莫羅木蘭占巴達木林之呼弼勒罕綽罕額爾德尼於光緒二十三年三月間圓寂。當經呈報大部（理藩部）、盟長各在案。據大乘轉輪寺達喇嘛、得木齊、格斯貴等稟報，本師傅喇嘛之呼弼勒罕經徒眾諷經祈禱，尋訪得本旗巴彥博拉克地方遊牧居住之護衛唐古忒之子阿巴里瑪特，屬雞，年五歲。又本旗阿魯哈穆爾地方遊牧居住之護衛圖博特之子色博克瑪特，屬雞，年五歲。此二子稟賦聰慧莊重，且能認識歷輩所奉佛尊。本師傅喇嘛之呼弼勒罕此二子中究竟為誰，懇乞轉報，俾得相會。等因前來。⁽⁴⁷⁾

呈文隨後詳細追溯了莫羅木蘭占巴一系的轉世歷史：

綽罕額爾德尼前輩系從前本旗有莫羅木蘭占巴洛布桑勒萬，曾在西藏居住二十餘年，習學經藝，乃住于國隆寺，大修經卷。嗣經王薩達克端多布以恭祝皇上（乾隆帝）萬壽建蓋廟宇，令其居住，與徒眾諷經。終於乾隆二十六年，蒙賞廟名曰大乘轉輪寺。後洛布桑勒萬圓寂，訪得教汗王旗台吉巴雅爾札布之子噶勒桑多布湍，作為該呼畢勒罕，伊徒眾迎接居住原廟。噶勒桑多布湍圓寂後，訪得巴勒陳之子達木林，經章嘉呼圖克圖會同理藩院堂官松連掣定，即作為該呼弼勒罕。達木林圓寂後，于同治十一年經護印札薩克喇嘛會同宗室載驚、廣壽掣出台吉彭楚克之子綽罕額爾德尼作為莫羅木蘭占巴之呼弼勒罕，經伊徒眾迎居原廟。綽罕額爾德尼於光緒九年，擬往西藏學經。迭經呈報，請領路引，行抵西寧染患腿疾，不克遠行而返。於十六、二十一等年經大部、盟長等處札飭該班，曾經入都瞻仰天顏，入班諷誦洞黎經卷兩次，該班瞻仰蒙賞貂皮、緞疋。現已圓寂。訪得二子，究竟為誰，懇乞盟長轉報大部入瓶掣籤指定。⁽⁴⁸⁾

⁽⁴⁶⁾ 妙舟法師：《蒙藏佛教史》第五篇第三章第一節。

⁽⁴⁷⁾ “錫林郭勒盟長阿巴噶扎薩克多羅郡王楊桑為呈報烏珠穆沁親王旗訪得本旗大乘轉輪寺呼畢勒罕情形事（光緒二十七年七月二十五日）”，漢文，《雍和宮檔》第二十三冊，第397—398頁。

⁽⁴⁸⁾ “錫林郭勒盟長阿巴噶扎薩克多羅郡王楊桑為呈報烏珠穆沁親王旗訪得本旗大乘轉輪寺呼畢勒罕情形事（光緒二十七年七月二十五日）”，漢文，《雍和宮檔》第二十三冊，第397—

這是錫林郭勒盟長所呈的漢文文書，對比其所呈原蒙古文文書的內容，有很多刪節。其中有一些是很重要的內容，如其一世洛布桑勒萬圓寂後，漢譯稿曰：“後洛布桑勒萬圓寂，訪得教汗王旗台吉巴雅爾札布之子噶勒桑多布湍作為該呼畢勒罕。”⁽⁴⁹⁾但是，我們查閱對比蒙古文原文書後發現，內容更為豐富，說洛布桑勒萬病故後，“因尋覓其呼畢勒罕事，赴西藏詢問達賴喇嘛、拉穆吹忠等，而得到認為教漢王達欽旗台吉巴雅爾札布之子噶勒桑多布湍為洛布桑勒萬之呼畢勒罕，頒發唐古特文書。乾隆五年，本處將此事呈報大院（理藩院）。”嘉慶六年，噶勒桑多布湍赴前藏習經，班禪額爾德尼嘉獎其獲得優異成績，授予“莫爾根堪布”號。道光六年他圓寂後，于道光十一年上報理藩院，在雍和宮金瓶內掣定達木林為該呼畢勒罕。道光二十七年，他赴藏習經，因成績突出，從班禪額爾德尼處獲得“諾木齊莫爾根堪布”號⁽⁵⁰⁾。由此看來，金瓶設置以前，內蒙古地區的活佛也是通過拉穆吹忠降神認定呼畢勒罕。乾隆末年出臺金瓶掣籤制度後，該活佛的歷輩呼畢勒罕都是通過雍和宮金瓶掣定出來的。

此外，相關檔案中還透露出另一個信息，認定呼畢勒罕比以前多了一個手續，即旗裡或該活佛的商卓特巴那裡要出具一份印結書。此次烏珠穆沁莫羅木蘭占巴的印結書如下：

錫林果勒盟烏珠穆沁札薩克和碩車臣親王索諾木喇布坦旗護印協理台吉車凌旺濟勒為加具印結事，本旗舊有大乘轉輪寺施呼根喇嘛入于呼圖克圖分內莫羅木蘭占巴綽罕額爾德尼之呼弼勒罕訪得二子，秉賦清秀，且能于該喇嘛歷輩所奉佛尊認識清楚，實屬靈異，相應加具札薩克印結呈報。⁽⁵¹⁾

光緒二十七年十一月理藩院典屬司上奏，“臣等詳核與例相符，謹將該二子繕寫名籤，臣宗室壽前期會同護理喇嘛印務札薩克喇嘛丹畢窩系爾封入于雍和宮所供之金本巴瓶內，交該喇嘛等誦經三日。臣宗室會第三日會同該札薩克喇嘛丹畢窩系爾，將護衛唐古忒之子阿巴里瑪特掣出，即請作為莫羅木蘭占巴綽罕額爾德尼之呼畢勒罕”，奉朱批：知道了⁽⁵²⁾。至此，莫羅木蘭占巴綽罕額爾德尼的呼畢勒罕得到朝廷的認可，其後就是請到本寺

398 頁。

⁽⁴⁹⁾ “錫林郭勒盟長阿巴噶扎薩克多羅郡王楊桑為呈報烏珠穆沁親王旗訪得本旗大乘轉輪寺呼畢勒罕情形事（光緒二十七年七月二十五日）”，漢文，《雍和宮檔》第二十三冊，第 397—398 頁。

⁽⁵⁰⁾ “錫林郭勒盟長阿巴噶扎薩克多羅郡王楊桑為呈報烏珠穆沁親王旗訪得本旗大乘轉輪寺呼畢勒罕情形事（光緒二十七年七月十九日）”，蒙古文，《雍和宮檔》第二十三冊，第 406—400 頁。

⁽⁵¹⁾ “錫林郭勒盟長阿巴噶扎薩克多羅郡王楊桑為呈報烏珠穆沁親王旗訪得本旗大乘轉輪寺呼畢勒罕情形事（光緒二十七年七月十九日）”（甘結）漢文，《雍和宮檔》第二十三冊，第 399 頁。

⁽⁵²⁾ “奏為掣定錫林郭勒盟烏珠穆沁親王旗莫羅木蘭占巴綽爾汗額爾德尼呼畢勒罕事摺稿（光緒

坐床了。

（六）卓索圖盟土默特左翼旗察罕殿齊呼圖克圖之呼畢勒罕的掣定

卓索圖盟長處報來尋得二名土默特左翼旗察罕殿齊（Mon. Čayan diyanČi）呼圖克圖之轉世靈童事後，理藩院上奏皇帝。該奏摺可能是一份草稿，在檔案中沒有出現日期。從《實錄》裡去找檔案中出現的“土默特郡王銜多羅貝勒色凌那木濟勒旺寶”、“喀喇沁輔國公僧格札布”，可以推定檔案形成的年代應該是光緒二十年以後。從檔案文書中還可以瞭解到尋訪所得兩名轉世靈童的基本情況：“土默特郡王品級札薩克多羅貝勒色凌那木濟勒旺布旗察罕殿齊呼圖克圖圓寂後，他的徒眾尋得哲理木盟科爾沁達爾漢親王旗頭等台吉烏爾土那蘇圖之子色博克尼瑪，今年六歲。我們土默特郡王品級多羅貝勒色凌那木濟勒旺布旗四等台吉達里扎布之子雅什達林，今年七歲。”將情況報到理藩院，準備理藩院堂官和掌管京城喇嘛印務札薩克達喇嘛等人會同在雍和宮金瓶內掣定呼畢勒罕事宜，為此請旨。⁽⁵³⁾檔案中沒有記錄這次掣定的結果。

據固始噶居巴·洛桑澤培《蒙古佛教史》載，察罕殿齊是博克達額齊格喇嘛一世內齊托因的弟子，他在卓索圖盟的蒙古爾津旗的三個靜修地專心修行體驗達十八年，成為有殊勝證悟的大德，並修建了蒙古爾津寺即瑞應寺。他的轉世建立了顯宗學院及密宗學院，廣弘佛法。⁽⁵⁴⁾

（七）賽因諾顏部咱雅班第達呼圖克圖之呼畢勒罕的掣定。

雍和宮檔案也留下來一些喀爾喀呼圖克圖們的轉世資料。如光緒三十三年至三十四年，在雍和宮金瓶掣定賽因諾顏部咱雅班第達（Tib. zay-a bandida）呼圖克圖呼畢勒罕。光緒三十年二月，賽因諾顏部咱雅班第達呼圖克圖袞布札布圓寂，當時上報理藩院，命其商卓特巴尋覓呼圖克圖之呼畢勒罕。商卓特巴車伯克多爾濟稟報，尋得二名靈童，請求將他們姓名繕寫入金瓶內掣定。接到文書後，光緒三十三年九月二十四日護理喀爾喀齊齊爾里克盟（即賽因諾顏部）長印務之副盟長處將商卓特巴的文書及印結交給該商卓特巴處派遣之宰桑達什敦多克，限期他六十天送到北京，將東西交給理藩院指定的地方。⁽⁵⁵⁾

隨盟長處的呈文還有該商卓特巴處所出印結：

三音諾彥部落（即賽因諾顏部）咱雅班第達呼圖克圖之商卓特巴車伯克多爾濟為

二十七年十月）”，漢文，《雍和宮檔》第二十三冊，第 395—396 頁。

⁽⁵³⁾ “奏為掣定卓索圖盟土默特左翼旗查罕典齊呼圖克圖呼畢勒罕事摺”，滿文，《雍和宮檔》第二十三冊，第 408—406 頁。

⁽⁵⁴⁾ 《蒙古佛教史》，第 114—115 頁。

⁽⁵⁵⁾ “護理喀爾喀齊齊爾勒克盟印務副盟長扎薩克多羅郡王庫魯固木扎布為請掣定賽因諾顏部咱雅班第達呼圖克圖事致理藩院呈（光緒三十三年九月二十四日）”，蒙古文，《雍和宮檔》第二十三冊，第 410 頁。

出具印結事，本咱雅班第達呼圖克圖棍布札布前於光緒三十年二月間圓寂時，呈報在案。今訪得本徒黑人（按：俗人）索諾木多爾濟之子津巴車林，現年三歲，黑人塔爾濟雅之子巴扎爾，現年三歲。此二子異常穎悟，篤嗜黃教，氣像尤屬清潔，識認前輩呼圖克圖舊用金鈴等物。卑商卓特巴車伯克多爾濟詳查是實。為此出具印結呈報。光緒三十三年九月二十日。⁽⁵⁶⁾

波茲德涅耶夫的行紀對咱雅活佛及其庫倫有較詳細的記載。當時，喀爾喀三大活佛系統是白色帳幕的汗哲布尊丹巴、黃色帳幕的汗札雅班第達（即咱雅班第達）和黑色帳幕的汗喇嘛葛根。1892 年 9 月波茲德涅耶夫到咱雅庫倫時，當時的咱雅班第達呼圖克圖是第五世，名為羅布藏納木濟勒，他出生於三音諾顏部的甘珠爾公旗。當年二十七歲。⁽⁵⁷⁾

光緒三十四年二月十八日，理藩部上奏，理藩部堂官會同護印札薩克喇嘛烏爾吉巴雅爾封入于雍和宮所供之金奔巴瓶內，札飭該札薩克喇嘛烏爾吉巴雅爾等諷經三日，第三日掣出津巴車林，即請作為咱雅班第達呼圖克圖棍布札布之呼畢勒罕⁽⁵⁸⁾。獲得皇帝的批准。

從賽因諾顏部所派使者送文書至京到理藩院主持掣定咱雅班第達呼畢勒罕，用了不到五個月的時間即完成了。但是，因為史料所限，在此無法斷定此次掣出的呼畢勒罕是第幾世咱雅班第達呼圖克圖。

（八）額爾德尼墨爾根班第達之呼畢勒罕的掣定

光緒三十四年，認定哲布尊丹巴呼圖克圖所屬額爾德尼墨爾根班第達（Tib. erdeni mergen bandida）杜噶爾扎布之呼畢勒罕。在該呼畢勒罕認定的程序上，與前述咱雅班第達呼畢勒罕掣定明顯不同的是通過哲布尊丹巴的額爾德尼商卓特巴、庫倫辦事大臣來上報理藩院辦理的。光緒三十四年三月，理藩院典屬司駁回庫倫辦事大臣的檔案文書中譴責其沒有交來尋得二子之印結書。其文如下：

旋經本部以光緒三十三年十一月二十六日收到請掣額爾德尼墨爾根班第達呼畢勒罕公文，並無該旗原送印結查明諮送，並抄錄該額爾德尼墨爾根班第達前輩入瓶籤掣成案及有無奸生子入瓶籤掣之案查明一併送部，用備參考。等因去後，茲據查明印結疏失，已令補送。並抄錄成案諮送前來。查送到奏案，並無奸生子字樣。此次如照

(56) “喀爾喀賽因諾顏部咱雅班第達呼圖克圖商卓特巴車伯克多爾濟為訪尋咱雅班第達呼圖克圖呼畢勒罕情形事甘結（光緒三十四年九月二十日）”，漢蒙文，《雍和宮檔》第二十三冊，第 411—412 頁。

(57) [俄] 波茲德涅耶夫著，劉漢明等譯《蒙古及蒙古人》第一卷，內蒙古人民出版社，1989 年，第 440—443 頁。

(58) “理藩部奏為掣定喀爾喀賽因諾顏部咱雅班第達呼圖克圖呼畢勒罕事摺稿（光緒三十四年二月十八日）”，漢滿文，《雍和宮檔》第二十三冊，第 413—417 頁。

原諮入奏，殊屬有瀆黃教。相應諮行庫倫辦事大臣，查照辦理可也。⁽⁵⁹⁾

應該是該文書傳達到了，大概半年後由靈童所管旗裡出具印結書⁽⁶⁰⁾。

這樣，上交文件材料就齊全了，到十二月時已經掣定該呼圖克圖之呼畢勒罕，檔案記載如下：

“臣等核與例案相符，將該二子繕寫名籤，臣恩順前期會同護印扎薩克喇嘛烏爾吉巴雅爾封入于雍和宮所供之金本巴瓶內，札飭該扎薩克喇嘛烏爾吉巴雅爾等諷經三日。臣達壽于第三日會同署印章嘉呼圖克圖，將溫布扎布之子奈當蘇倫掣出，即請作為額爾德尼墨爾根班第達杜噶爾扎布之呼畢勒罕。”⁽⁶¹⁾

三、 結 語

以上我們考察了金瓶掣籤制度的制定和在雍和宮設立金瓶的時間，以及雍和宮檔案所顯示的一些金瓶掣籤的事例。這一前人極少涉及的問題，通過筆者研究，補充了以往研究成果的不足，大致可以總結為以下幾點。

第一，金瓶掣籤制度制定的時間和目的。研究顯示，從製造兩隻金瓶到設置於拉薩大昭寺、北京雍和宮都是在乾隆五十七年內實現的。乾隆五十七年八月，乾隆帝給福康安等人的諭旨中說得很明確，即以後蒙藏地區的大呼圖克圖圓寂後尋得若干名靈童，最後須在拉薩大昭寺的金瓶內掣定。當年十月的《禦制喇嘛說》進一步明確了蒙古地方呼圖克圖之呼畢勒罕則在雍和宮金瓶內掣定。而乾隆五十八年初雍和宮開始實施金瓶掣籤認定蒙古地區的呼畢勒罕。金瓶掣籤制度到乾隆五十八年下半年以“事例”的形式確立和固定下來，成為歷史定制。

雍和宮金瓶掣定的這種程序，比之以往沒有金瓶設置時，其最主要的一個變化，就是在蒙古地區呼圖克圖的選定過程中，達賴喇嘛、班禪額爾德尼和吹忠等西藏方面的權勢無法再行干涉了。另外，金瓶掣籤制度確立時就規定“各蒙古汗、王、貝勒、貝子、公、札薩克台吉之子孫，均禁止指認呼畢勒罕”。從筆者所見雍和宮檔案有限的事例來看，這一項規定在一定範圍和時間內基本得到實行，這樣在一定程度上防止了蒙古地方政教勢力的聯合和權力集中。

第二，在雍和宮金瓶內掣定的呼圖克圖們的身份問題。按乾隆五十七年八月的諭旨，

⁽⁵⁹⁾ “理藩院典屬司為諮駁庫倫辦事大臣掣定哲布尊丹巴呼圖克圖所屬額爾德尼墨爾根班第達呼畢勒罕事致堂呈（光緒三十四年三月十六日）”，漢文，《雍和宮檔》第二十三冊，第422—423頁。

⁽⁶⁰⁾ “喀爾喀車臣汗部扎薩克輔國公通阿拉克等為訪尋額爾德尼墨爾根班第達諾門汗呼畢勒罕情形事甘結”，漢蒙文，《雍和宮檔》第二十三冊，第424—425頁。

⁽⁶¹⁾ “理藩部奏為掣定哲布尊丹巴呼圖克圖所屬額爾德尼墨爾根班第達呼畢勒罕事摺（光緒三十四年十二月二十日）”，漢滿文，《雍和宮檔》第二十三冊，第430—432頁。

蒙古地方呼圖克圖也應在大昭寺金瓶內掣定。五十八年初，根據乾隆帝的指令曾在拉薩大昭寺舉行了從科爾沁蒙古等地方送去的呼圖克圖之呼畢勒罕的試行掣定。而在雍和宮舉行金瓶掣籤也是在這一時候開始的。本文據雍和宮檔案舉例考察的在雍和宮掣籤認定的呼圖克圖之呼畢勒罕，其中西寧辦事大臣管轄區域內有 6 位（含兩輩章嘉呼圖克圖之呼畢勒罕），內蒙古有 2 位，外喀爾喀有 2 位，在蒙古地方的各呼圖克圖當中，哲布尊丹巴呼圖克圖從三世開始都從藏區尋得靈童，其歷輩呼畢勒罕的認定也都在拉薩。除了哲布尊丹巴呼圖克圖之外，蒙古地方各呼圖克圖之呼畢勒罕基本上都是在雍和宮金瓶內掣定的。西寧辦事大臣管轄區域內各呼圖克圖之呼畢勒罕的掣定有些複雜。按規定在拉薩或雍和宮都可以金瓶掣定。從雍和宮檔案看到的 6 位呼圖克圖都是在雍和宮金瓶內掣定的，他們當中的 5 位是駐京呼圖克圖，另一名是當地的呼圖克圖。那麼，駐京呼圖克圖之呼畢勒罕的認定是否都應經過雍和宮金瓶掣籤？對蒙古地區的呼圖克圖是否有免籤情況？目前看到的事例雖然有限，但是可以肯定，個別具有雍和宮任職背景的西藏活佛之呼畢勒罕中，也應有在雍和宮進行掣定的，這些問題還有待發掘更多史料進行深入研究。

第三，以金瓶掣籤來認定新呼畢勒罕的程序問題。從雍和宮檔案記載來看，在金瓶掣籤制度確立後，呼畢勒罕尋訪、認定和做床的程序，可以概括為幾個主要環節：首先是前世呼圖克圖、大喇嘛等圓寂後，其徒弟或商卓特巴上報盟、理藩院，開始尋訪稟賦聰慧、行止莊重的轉世靈童。一般找到兩名靈童，並讓他們認領前世的法器物品。然後，盟長處或辦事大臣處根據旗裡或該呼圖克圖、大喇嘛之商卓特巴的說明，將情況上呈理藩院，請求在雍和宮金瓶掣定。道光二年（1822 年）以後又有新規定，即由旗裡或商卓特巴處提供尋得靈童的保證書即印結，隨盟長呈文一同送到理藩院。再次，理藩院堂官與掌管京城喇嘛印務扎薩克達喇嘛會同將靈童姓名繕寫籤上，放入雍和宮金瓶內。札飭該扎薩克達喇嘛等誦經三天，第三天由理藩院堂官掣出一籤，公佈呼畢勒罕之姓名。嗣後由理藩院典屬司向皇帝上報掣定的結果，得到皇帝的批准。最後是由該呼圖克圖之徒弟、商卓特巴等根據理藩院、盟長處轉達的皇帝批准，請新呼畢勒罕坐床。除達賴喇嘛、班禪額爾德尼和哲布尊丹巴轉世之外，章嘉等駐京呼圖克圖的轉世，情願呈請來京者均於轉世後來京瞻仰天顏之日裁撤呼畢勒罕字樣。其各游牧處的呼圖克圖、諾們罕、班第達、堪布、綽爾濟等轉世後，均俟年至十八歲由該管大臣、盟長等核實報院裁撤。⁽⁶²⁾

與拉薩的金瓶掣定呼圖克圖之呼畢勒罕程序相比較，雍和宮的金瓶掣籤除了地點不同之外，最大的區別是拉薩的金瓶掣籤是由駐藏大臣來主持並在達賴喇嘛等三大寺的喇嘛們的參與下完成的，而雍和宮的金瓶掣籤是由理藩院堂官來主持，在掌管京城喇嘛印務扎薩克達喇嘛等京城喇嘛們的參與下完成的。此外，還有一些細節上也有差異，如拉薩金瓶掣籤前一般是諷經 7 天或 9 天，但是雍和宮的金瓶掣籤只諷經 3 天；道光二年以後蒙古地區該管旗加具印結來證明沒有弄虛作假等等。

(62) 《欽定理藩院則例》卷 56，“喇嘛事例一”，海南出版社，2000 年。